法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-06-01

座談会 村串仁三郎著『大正昭和期の鉱夫同職組合「友子」制度』をめぐって

土井, 徹平 / HAGIWARA, Susumu [Moderator] / DOI, Teppei / TAKEDA, Haruhito / ICHIHARA, Hiroshi / MURAKUSHI, Nisaburo / 萩原, 進[司会] / 村串, 仁三郎 / 市原, 博 / 武田, 晴人

(出版者 / Publisher)
法政大学経済学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
経済志林 / The Hosei University Economic Review
(巻 / Volume)
75
(号 / Number)
4
(開始ページ / Start Page)
251
(終了ページ / End Page)
311
(発行年 / Year)
2008-03-03
(URL)
https://doi.org/10.15002/00006135

【座談会】

村串仁三郎著『大正昭和期の鉱夫同職組合「友子」制度』をめぐって

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

開　催：2007年10月25日（木）　18時〜21時

場　所：法政大学BTタワー19Ｆ　経済学部資料室

参加者：村串仁三郎（法政大学名誉教授）

市原　　博（駿河台大学教授）

武田　晴人（東京大学経済学部教授）

土井　徹平（九州大学大学院博士後期課程）

萩原　　進（経済学部教授）（司会）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

鉱山史の専門家による座談会

萩　原（司会）　法政大学には，大学全体の同窓会は昔からあったのですが，学部別の同窓会はつくっている学部とつくっていない学部がありまして，経済学部には学部同窓会というものがありませんでした。今から約二十年前のことですが，経済学部も学部同窓会をつくろうという機運が興り，村串さんなどが音頭をとって経済学部同窓会がつくられました。その学部同窓会の事業としていろいろな事業をやってきているのですが，事業の一つとして法政大学と関係の深かった人で優れた学術書を書いた人を表彰する制度がつくられました。それが森嘉兵衛賞です。

法政の経済学部の卒業生で，岩手大学の教授で学芸学部長にもなられた方に森嘉兵衛先生という方がいらっしゃいます。森先生は，西欧経済史専攻の若手の学者であった大塚久雄先生が法政の経済学部で助教授として教鞭を取っておられた頃の門下生でして，日本経済史特に地域経済史といいますか，岩手の南部藩の経済史の研究で大きな業績をあげられ，後に岩手大学の教授にもなられました。その森先生の名前に因んで森嘉兵衛賞をつくろうと村串さんが提案され実現しました。以来経済学部同窓会は，優れた学術書を出された法政の関係者や，地方史を研究している人に，ほぼ毎年森嘉兵衛賞を授与してまいりました。

2006年度は，受賞式は昨年2007年６月に行なったのですが，３人の方が受賞されました。ところが，村串さんへの賞は予算がやや不足ということもあって，特別賞というかたちになり賞金が出せなかったのです。（笑）

村串さんには非常に悪いことをしましたが，そういうわけで賞金の出ない特別賞を村串さんは受賞するハメになってしまいました。（笑）

森嘉兵衛賞を受賞した作品は，去年の2006年度から法政

大学経済学部の学会誌『経済志林』に，座談会形式で議論を行ってその記録を載せていこうということになりました。ですから『経済志林』に座談会記録が掲載されるのは今回で2回目になります。そんなわけでこの座談会を開催させていただいた次第です。

本日の座談会の参加者ということで，私は鉱山史の分野のことはよく知りませんので，村串さんにどなたをお招きしたらいいだろうかと尋ねたところ，東大経済学部で日本経済史を教えていらっしゃる『日本産銅業史』の著者である武田晴人先生，それから駿河台大学で教鞭を取られている『炭鉱の労働社会史』の著者である市原博先生，すでに法政大学を定年退職されておられるのですが『足尾暴動の史的分析』の著者である二村一夫先生，それにもう一人どなたかというので，九大の大学院生で鉱山労働史を専攻している若手研究者の土井徹平さんの4人を推薦されました。あいにく二村先生は，体調がすぐれないので参加できないということで，今日の座談会は，司会を含めて5人で行なうことになった次第です。

それでは，最初に参加者の皆様から簡単な自己紹介をお願いします。

村　串　私はもともと労働問題の理論を目指して，マルクスの賃労働論を主な研究課題としてやってきています。あとで友子研究の動機とか細かいところに入りますが，一昨年定年で退職しました。今日は，私ごときのためにお集まりいただきありがとうございます。

武　田　私は大学院の時代ぐらいから日本の非鉄金属鉱山業の研究をやりまして，その関係で多少，鉱山労働についても勉強をしてきましたが，1987年に『日本産銅業史』を書いて，それきり鉱山業史についてほとんど勉強するのをやめてしまっています。

きょうはどのくらい意味のある発言ができるかわからないのですが，勉強させてもらいに来ました。久しぶりに鉱山のことを思い出しながら，お話を伺おうと思っています。

市　原　私は村串さんにはかなり長いことお世話になっていまして，大学院のマスター1年のときに金属鉱山研究会で松田解子さんのお話を聞

く機会がありまして，そのときにはじめて村串さんにお会いしたのではないかと思います。

当時は，足尾銅山の大正期の労働争議の研究を修士論文で取り組んでいまして，それを何とか修士論文にまとめたあとに，北海道の炭鉱の労働史の研究を博士課程でやりました。その縁で北海道の北海学園大学に就職しまして，そのころ村串さんから友子の論文をいっぱい送っていただきまして，すごく刺激を受けました。

その後1994年に城西国際大学に戻ってきまして，そのあと東京で開かれている金属鉱山研究会に出ていくようになりまして，いろいろお世話になったという関係です。

土　井　私は鉱山の研究を始めてから，それほど長い期間やっているわけではないのですが，最初に鉱山の研究を始めたのは大学３年生の卒業論文の研究でして，足尾銅山の明治40年に起きた暴動について研究しようかと考えまして鉱夫を勉強し始めました。

その際に「友子」にも出会いまして，その時点では友子が何かはまったくわかっていませんでしたので，一から勉強するという状況で，そこではじめて手に取ったのが村串先生の『日本の伝統的労資関係－友子制度史の研究』でした。

それ以降，大学院に進んで同様に足尾銅山の友子であるとか労使関係の研究を続けてきたのですが，その際に金属鉱山研究会に入りまして，そこで村串先生ともお会いしました。それ以降，村串先生から個人的にご指導なども賜りまして，現在もいろいろとお世話になっています。研究のほうも，友子研究を現在も継続しています。

萩　原　私は大学では労働経済論という科目を担当していまして，労働経済学を専攻しているのですが，主にアメリカの労働運動史と大企業の労使関係の形成史を研究してきました。そのほか，戦後日本の労使関係の形成期を探るために，第二次大戦期の戦時労働市場や産業報国会なども勉強してきました。

炭鉱と金属鉱山の労働史に関しては，村串さんから同僚として著書を全部いただいてきているのですが，申し訳ないことにまったく読んでおりません。著書の１つである『日本炭鉱賃労働史論』は，村串さんの学位請求論文だったのですが，私はたしか学位論文の審査員であったにもかかわらず，序文ぐらいしかまともに読まずに審査をするという，まことにひどいことをやったのです。（笑）主査の審査員の方が，石炭産業の専門家である矢田俊文さんだったので，安心して横着してしまったのです。

しかし，村串さんがいよいよ70歳になって定年退職するというので，村串さんのこれまでの仕事に眼を通しておこうと思うようになりました。私は，前から村串さんの生き方には非常に興味をもっていました。彼は，労働者出身で，町工場で働きながら法政の夜間の社会学部を卒業して研究者になったのです。そこに人間として興味を感じていまして，ちゃんと読んでみようと思ったのです。まず一番とっつきやすい啓蒙的に書かれた『日本の鉱夫』を，ていねいに読みました。

それで少し触発されて，旧足尾銅山に見学に行ったり，永岡鶴蔵の本を買ってきたり，それから武田先生の本を手に入れようと思ったのですが，古書店でものすごく高くて，在庫が残っていたら是非安く売っていただきたいのですが。（笑）そうとうの高値ですよ，古書店で。

村　串　３万円ぐらい？

萩　原　そんなにはしないけれども，１万5000円は越えていますよ。そんなことで，ぼつぼつ金属鉱山関係の本を集めているところです。

だから，きょうの司会はまったくミスキャストなのですが，彼は昔からの親友で，長いこと同僚で一緒にやってきましたので，ずうずうしく司会をやらせていただこうということになりました。どうか，よろしくお願いいたします。

それでは最初に，森嘉兵衛賞の受賞作品ですが，時潮社から出た7000円もする分厚い本，『大正昭和期の鉱夫同職組合「友子」制度』が受賞作品です。副題が「続・日本の伝統的労資関係」となっていて，1980年に出た『日

本の伝統的労資関係』とセットなのですが，残念ながら出版社が別々なのです。私は，この2冊は日本近代の労働史研究において画期的な大きな仕事だったと思っています。この2冊の本は，ぜひとも専門家の方々に議論をしていただき，きちんと評価をしてもらって，問題点は問題点として指摘してもらっておく必要があるのではないかと思います。きょうはこの2冊を対象に議論をしたいと思いますが，最初に村串さんから，友子研究にのめり込んでいった過程とか研究の裏話，そんな話をしてもらいたいと思います。

なぜ友子研究を始めたのか ──『資本論』解釈学がいやになり実証研究へ

村　串　『大原社会問題研究所雑誌』に「研究回顧」というコーナーがあって，すでに何人かの方が書いておられます。だいぶ前から寄稿を依頼されていたんですが，私は最初ぜんぜん書くつもりはなかったのですが，2005年の暮れにちょうど定年退職を控えておりましたので，「そうだ，一度自分の研究を回顧しておいてもいいかな」と思ったわけです。おそらく退職するときに，それを皆さんに配って，おれはこんなことしかやってこなかったという懺悔をしたらいいかなというので，それを書いたんです。

表題が「『資本論』から鉱夫の歴史・レジャー・国立公園の自然保護史の研究へ」となっていて，私の研究テーマの大まかな変遷が語られています。そこでも，おれは一体何のために友子研究を始めたのかということを書いていますので，機会があったら読んでいただければと思います。

今日は萩原さんの司会に従って，最初に友子研究の回顧をしろということのようですので，一体何をしゃべったらいいのかとずっと考え続けてきました。『大原社会問題研究所雑誌』にも書いているのですが，今日の朝もまたメモってみたのです。

今日の議論は「友子」が課題なので，友子とは何かについて，最初に簡単に説明しておくことにします。今日出席してもらっている土井君の説明によると，少し長くなりますがあえて土井君の文章を引用しますと，次の

ようになります。

「友子とは，わが国の鉱山において掘削•採鉱を担った「坑夫」を主成員として[1]，徳川時代に成立し，明治・大正期における鉱山業の発展とともに著しい発達を遂げた鉱山労働者の自治的集団のことである。

坑夫は，親方―子方関係を起点として，同職者間で社会的な連帯を果たし，閉鎖的は社会集団，友子を発達させていた。そしてここで，当時，掘削・採鉱に必要であった技能の伝承を行い熟練労働力の養成を行うと同時に，負傷，冠婚葬祭時における扶助をはじめ，他山からやってきた坑夫への一宿一飯の提供，就職斡旋など，同職者間で互助的な交際を行った（この交際には，山内での坑夫間の交際である「山中交際」と，他山からやってきた坑夫との交際である「箱元交際」とがあった）。さらに友子の坑夫は，投票によって代表者を選出し，役員会，総会において坑夫内部で生じた問題を処理するなど，山内自治すら実現していた。

友子は，近代の鉱山業の発展とともに発達した労働者の生活共同体であったことから，これまで主に社会学者と経済史学者らによって研究が行われてきた。戦後の友子研究を大別すると，おおむね以下のようにまとめることができる。まず，①松島静雄氏に代表される社会学的研究，②村串仁三郎氏に代表される労使関係史的研究（労働運動も含む），③左合藤三郎氏，市原博氏に代表される労務管理史的研究である。」（『鉱山研究』第84号，土井徹平「友子研究の現状と課題」，１頁）

ところで，そういう友子をそもそも何で研究しようとしたのかというのが私にとっても一つの大問題なのですが，友子研究を始めた理由は二つあります。先ほども言いましたが，私はもともと労働者階級論や労働者階級を研究するための理論を研究したいと，法政の大学院に入ったころは思っていまして，実際に研究していたわけですね。

『資本論』における賃労働理論なんていう研究は，これは題名がすごく悪

いのですが，『賃労働原論』という本になっています。私が希望したのは，『資本論第一巻における賃労働理論の研究』ということでしたが，日本評論社の編集者に見事に題名を拒否されました。

要するに，30歳代は『資本論』とかマルクス主義を研究して，40歳代に入って実際に本を出してみて，そのあとにそもそも一体これらの理論研究は何の意味があるのだ。つまり，おれのやっていることは正しいのか。あるいは，マルクスは正しいのか，『資本論』というのは本当に正しいのか。「正しいのか」というのはおかしい表現ですが，正当化できるのか。そういう疑問に逆に取りつかれてしまった。結局，それは研究が行き詰まってしまったということですね。それで新しい研究をしなければいけないというので友子研究に入った。

もう一つの友子研究を始めた理由は，もともと私は学生時代から鉱山労働史に興味があって，学部の卒論が「高島炭鉱における納屋制度」ということで，これはたまたまですが，そういうこともやっていた。そして自分の研究の方向を失ったときに，結局学生のころに戻って，鉱山労働史を，言ってしまえばドグマティックな理論研究から，実証的な労働史研究に転換したということになりますかね。

そのようになる背景はいろいろありまして，さきの「研究回顧」でも書いたり，また萩原さんが私の退職を記念して『経済志林』（第73巻第３号）で司会してくれた座談会「人と学問：研究生活の回顧」でもしゃべっているのですが，そもそも私が大学生のころに炭鉱史を研究するに至った理由が，左翼学生で学生運動ばかりやっていて，そしてマルクス主義に心酔していた。そのときにスターリン批判，その前に六全協というのがあります。これは注を入れないと，何のことか，我々の世代にしかわからないことなのですが。

土井さんはわかるかい？

土　井　いや，わからないですね。

村　串　それからスターリン批判も相当こたえまして，つまり今まで

自分が信じていた共産主義，マルクス，スターリンというものが一夜にして批判の対象になる。あるいは，間違いを犯してきたといわれる。そんなことでノイローゼになってしまって，どうしたらいいかと悩み続けました。つまり今まで自分の頭で何か物事を考えたことがない。例えばハンガリー事件が起こると，まずこの事件に関する日本共産党の機関紙『赤旗』の見解を読んでハンガリー事件を理解するとか，そういう自分が何ともおかしく感じ始めたのです。

自分で物事を考えるようになりたいというので，たまたまなのですが，高島炭鉱の歴史を自分で考えて，自分で資料を集めて，そして権威をいっさい無視して，自分で高島炭鉱の納屋制度史を書いてみようということにしたのです。

しかも，そのときに出会ったのが，もともと私の大学生のときの先生が，たしか山田盛太郎の三つ年下の同郷の人だったと思うのですが，私の先生が山田さん，山田さんといって，山田盛太郎の心酔者であり，かつ批判的だったということがあって，「村串君，批判的に『日本資本主義分析』を読まなければいけませんよ」と言われた。

この人は講座派ではないのではないかと思ったんですけれども，どちらかというと日本共産党の中央サイドにいた人で，山田盛太郎講座派対中央サイドの対立のなかで，山田理論に対して批判的な立場の先生だった。

そういうことがあって，高島炭鉱史をやっていたら，どうも山田盛太郎の高島炭鉱の納屋制度の理解がおかしいことがわかった。まったく実証的でないということです。要するに，大先生というのはこんなに実証的じゃないのか（笑）。その当時，非常に図式的で，図式は見事なんだけれども，実証性が全然ないと感じまして，「ああ，こんなものなのか」と，そこではじめて歴史の実証性に目覚めたということがありました。

その後，大学院に入って勉強し始めたときに，私は当時マルクス主義者と自認していて，『資本論』研究を始めたり，マルクスを引用しながら労働者階級論をさんざん書いて，欲望論とかマルクスに即してやっていたので

すが，実は半分ぐらいはマルクスに対する疑問があって，おかしいじゃないかと思いながらやっていた。そのおかしさを，マルクスをいわばちゃんと研究することによって確認したいというのが私のマルクス研究だったわけです。

それが『賃労働原論』であり，あるいは私のマルクス欲望論に関する論文なのですけれども，一生懸命マルクスを正当化し，正しいものとして理解しようとしていた。30歳代がそうで，40歳代に入るころ，まだソ連は崩壊していなかったけれども，例のソ連社会主義とか中国社会主義とか，そういう現実世界での社会主義に対する幻滅というものがあって，結局マルクス主義はだめではないかと思うようになった。それが40歳代末です。

刺激になった金属鉱山研究会

村　串　50歳代のはじめから，もうマルクス主義的な研究はやめて何かやりたいと思ったときに，ああ，そうだ，昔納屋制度をやって，友子の問題はやらなかったというので，友子の問題をやろう。つまり，自分の学問というものを，何々主義によって自分たちの理論の正しさを証明しようというのではなくて，ある事象，歴史を素直に自分なりに実証的に理解しようと，ただのクソ実証主義みたいなもので自分の学者としての使命を全うしようということで友子研究が始まった。

しかも，そのきっかけが，私が44歳のときに金属鉱山研究会を主宰していた村上安正さんという人が，たまたま私の『日本炭鉱賃労働史論』を読んで何か報告してくれということで，じゃあ，昔ぜひやりたいと思っていた友子を少し自分なりに考えて報告しようと。報告が1979年８月に『金属鉱山研究会会報』に載っている「友子についての一考察－労働組合史の面から－」です。そのときは市原さんは，いらっしゃらなかった？

市　原　私はちょうどマスター１年だったんですね。

村　串　この私の報告は聞いていない？

市　原　聞いていないです。お会いしたのはそのあとです。

村　串　　それで基本的な文献は全部読んで，友子をはじめて自分で勉強したんです。そうしたら，すごく面白い。と同時に，山田盛太郎が言っていたような友子観とまったく違った友子像が出てきたわけで，それで友子研究にのめり込んでいくわけです。

1980年の『経済志林』に「友子研究の回顧と課題」として友子の研究史を１年くらいでまとめまして，それをまとめたら，いよいよ友子研究が面白くなって，これは生涯やるに足る研究テーマではないかと大げさに考えるようになった。そして，その後10年間友子の実証的研究をすることになった。

そのポイントは，それまではマルクス主義者を自認して，マルクスだのレーニンだのをいつも念頭において，彼らの言質を常に引用しながら自分の主張の正当性を主張するという教条主義的な研究スタイルをはじめてそこでやめて，マルクスだのレーニンだの一切引用しないで友子研究をしました。しかも私は労農派シンパではなくて，講座派シンパの労農派同情派というか，労農派の影響もそうとう受けています。しかも，従来の労農派とか講座派という，割と主義・イズムの強い研究から離れて，いわば解放されて自由に研究しようと，それがポイントだったわけです。

それで10年間研究して，私なりの友子像をつくり出した。江戸・明治時代の友子を10年間，そしてあとの10年間は大正・昭和の友子で，いちおう友子の歴史を，生成，発展，消滅のところまで自分なりに押さえてみたということです。

本そのものは最後の大正昭和のものはついこの間まとめたわけですが，その前に論文をずっと書いていたので，日本の労使関係のなかで鉱山労働

は非常に大きいウエートを占めていたわけですが，友子という制度を通じて比較的ちゃんと鉱山労働史を何とか実証的に押さえたかなということです。

萩　原　最初に市原さんから，村串さんの友子研究をどのように受け取っていらっしゃるか，感想を述べていただいて，それから土井さんからもうちょっと細かく研究史的なコメントをやっていただきたいと思います。

市　原　今の村串さんのお話を伺いまして，私がはじめてお会いしたのは1980年ですから，ちょうど研究が転換した直後ではないかと思います。ですから，私にとってはその前の賃労働理論の研究をされている姿は全然知らないので，最初から鉱山労働の実証研究をされている方だとずっと見てきたということがあります。

今のお話を伺って，村串友子論あるいは村串鉱山労働論というか，その一つの特徴は，友子にしても飯場制度にしても近代的な性格を強調したがるというか，そういうところがありますよね。高島炭鉱の納屋制度の研究でも，納屋制度は産業資本主義に適合した制度で，むしろ産業資本主義の発展とともにそれができたものだと主張されていますし，友子についても同様の主張がされている。

これが特徴的だなと思っていたのですが，今のお話を伺いますと，これは講座派に対する疑問から，そのように転換したというところが影響しているんでしょうね。

萩　原　山田盛太郎の『日本資本主義分析』に代表される講座派的な労働史を何とかしてやっつけてやろうといった，明らかに党派的な傾向がありますね。（笑）　それで自然に，近代性を強調するということにならざるを得ない。

市　原　理論的にいうとそういうところを感じていたのと，一方で最初に理論をやられたのですが，そのあとはとにかくものすごく実証的で，理論的なまとめ方をどうしようかというのをあまり考えられずに，バーッ

と馬力に任せて実証をやってこられた。

ですから，いろいろな事実を掘り起こされて，しかも生産性がすごく高かったものですから，どんどん論文が送られてきまして，我々としては読むのが大変だったのですが，読むとそれぞれ新しい資料を掘り起こされて，すごく勉強しながら読んできたという感じですね。

村　串　まったくそのとおりです。あらゆる党派とか理論から自由になりたいと言ったけれども，底流には講座派に対する憎しみとは言わないけれども（笑），自分が信じてきたものが引っ繰り返ったときの反感。それが根底にあって，何もあれほど納屋制度の資本主義性を，主張することもなかったような気もするんだけれども，やはり目立ちたいと思うと，そんなことになったんですね。

最近はそういうのは全然ないんですけれども，若いときはそういう気持ちが満ち満ちていた。それが研究のエネルギーだったのではないかという気がします（笑）。

実証的な友子研究の可能性 ── 難しい熟練形成過程の実証

萩　原　武田さん，どうでしょうか。

武　田　私自身は経済学部に入って，最初にゼミの演習で読まされたのが山田盛太郎の『日本資本主義分析』で，それは何度も読まされました。そのなかで「友子って何か妙なものがあるな」というぐらいの認識しかはじめはなかったんですが，結局自分自身の研究としては，その問題を見事に避けました。

先ほども産業史だと申しましたが，非鉄金属鉱山業の産業発展を明らかにしていくという視点で考えたら，労使関係の骨格がわかればいいので，それに重なっているインフォーマルな社会組織はとりあえず棚に上げても何とかなる。というか，そこに入り込むとえらく大変そうだったので，労働問題はやらなければいけないとは思っていたのですが，飯場制度一本でまとめましたから，そういう意味では，まず村串さんのお仕事に対しては，

「まいった」という感じです。

友子の問題は鉱山史のある意味ではミステリアスな部分で，いろいろな説があります。私も最初に読んだのは松島静雄の本で，それから大山敷太郎を一応は読んだりしたのですが，とてもこれは歯が立たなかった。

村串さんのお仕事は，本気になると資料は出てくるんだなというのがまず第一印象で（笑），これだけ資料があったのかという印象です。そういう意味ではたいへんよく資料を探しておられる。

他方で，もともと理論家だったということを伺って納得がいったことは，市原さんとちょっと印象が違うんですけれども，けっこう大胆に推論して，「こうだ」と言い切れる論理の切れ味が，もう一つの特徴なのではないか。実証的な根拠を求められたときに，私なら「それはちょっと言えないな」とためらうところを，思い切って言ってくださっているところはありがたい。

具体的なもっと細かい論点はいくつあると思いますが，一番の特徴的なところは，飯場制度よりは友子制度を前面に出すことで，労働史という視点から重要な問題提起ができる，これは確信があってのことかは判りませんが，全体をこの問題意識・視点を貫くことでまとめていることだと思います。

それにもしあえて異論というか，ここはどうなのかという疑問をぶつけるとすれば，いくつかの機能を取り上げているんですが，友子制度で強調されていて，おそらく飯場制度ではあまり議論されていないのが熟練養成の問題だと思います。そのことがきちんと説けているかどうかが，この研究に対する評価を定めていくような気がしています。

市　原　今の話と関係するんですが，実は私も推論ということでは同じような印象を受けています。たしか前に，この本をいただいたときにお礼のお手紙のなかでそういうことを書いた記憶がありまして，そのあと金属鉱山研究会でお会いしたときに，とにかく資料が限られていて，資料の範囲内で書こうとするとわからないことが多すぎるので，ある程度は推論

していかないと友子はわからないとおっしゃっていました。

ですから，歴史研究で資料がないときに，実証とそれを超える部分の推論の取り扱い方も一つ重要な問題になるのかなと感じています。

村　串　私は歴史家ではないので，歴史を好んで研究しているけれども，歴史家としてちゃんと修業していない。だから，いま言われたのはまさにそのとおりであって，理論を組み立てて，自説をかなり思い切って推論的に出してしまうところは，まさに仰せのとおりですね。

それはおそらく歴史家だったら許されないかもしれないという気もしているけれども，歴史をやっているけれども，歴史家だという自覚がないんですよね。

萩　原　たしかに歴史学は文字資料（史料），文字で書かれた史料から議論するのが本筋だから，資料の裏付けのない議論はできないわけね。だけど，裏付けにならないと思われている文字資料というのが実はいろいろあるわけですよ。

ぼくが非常に面白いと思うのは，柳田国男の民俗学の方法です。例えば有名な『木綿以前の事』で利用されている文字資料なんていうのは江戸時代の川柳ですよ。ぼくは「木綿革命」という言い方をしているのですが，日本で綿製品が全国的に普及したことによって日本人の暮らしは革命的に変わった，特に女性の日常生活に大きな変化が出てきた。その変化を柳田は，川柳を分析することによって明らかにしていくのですよ。

柳田はすごいなと思った。要するに俳句は高度な芸術で，自然に託して人生の感懐を述べる象徴詩なのですが，川柳は自然よりも人間の世俗の生活に関心を向けています。ですから，人間社会というか人間そのものについて詩を書きたいと思っている人たちが始めたのが川柳なのです。だから川柳が出てきて以来，日常生活を描いた俳句が膨大に残っているのですよ。

そうすると，例えば吉原の研究なんかはほとんど川柳でできます。膨大な川柳が残っているのです。東大の法学部には，吉原の研究を専門にしていた石井良助という大法制史家（文化勲章の受章者）の先生がおられまし

たよね。川柳というのは歴史学で史料と見なされないんじゃないですか。

武　田　いや，必ずしもそうじゃないと思います。扱い方次第だとは思いますけれどもね。

萩　原　柳田国男は，一種独特の想像力で，川柳という形で残された資料から，想像力で補って民俗を描き出しているわけです。あの柳田民俗学は，『木綿以前の事』はもしかしたら全部うそっぱちだったかもしれない。しかしだいたい事実に近かったとなると，すごいですよね。川柳で日本人の生活史を見事に描いてしまったわけですから。

ですから，わずかな資料を見つけてきて，それでちょっと行き過ぎではないかというぐらい抽象化したり拡大解釈したりしても，できあがってくる絵がモザイクでなければいいと思うんです。きれいに絵ができあがってきたら，それは一つの絵だと思うのです。そこは方法的に困難なところですがね。

武　田　難しいですね。ただ，論理的に破たんしているとは全然思わないので，そうだとすると問題は，そこの推論の部分をこれから裏付ける可能性があるかどうか，歴史の側が考えなければいけないのではないでしょうか。

画期的だった共済団体論から同職組合論への転換

萩　原　土井さん，どうですか。

土　井　友子はなかなか資料がないというか量が少ないので，当然そこはある程度推論で埋めないといけないというところが出てくるとは思うんですが，村串先生のご研究は，旧来の友子研究のなかでも最も実証的な研究だと思います。

それは例えば近世の友子文書なんていうのは，旧来も存在しないと言われていたんですね。それを村串先生は各地の古文書類をもう一回洗い直す作業をやりまして，そのなかで発見してくる。そしてあと，それまでの友子研究が主に比較的大量に資料が残る大正・昭和期の資料に依拠して行わ

れてきたという経緯があるんですが，村串先生はそれでは問題があるということで，明治の初期から中期，これもその当時ほとんど資料は残っていないと考えられていたのですが，それを発掘して研究をなさった。

その結果として，友子というものが少なくとも19世紀の前半期には比較的広範囲に，具体的にいうと，東北や備中，飛騨，信州といった広範な地域に存在していることを確認された。それとあと明治以降の近代鉱山業の発展の過程で，より範囲を拡大して全国的な組織として確立する。こういった過程を具体的な資料にもとづいて，緻密に検討されている。ここは私が非常に刺激を受けた点であります。

それと，旧来は友子というのは主に鉱山労働の危険性を背景として成立した，鉱夫の実質的な共済組織として理解されていました。これに対して村串先生は，友子が共済機能のみならず，労働力の熟練養成と，労働市場における労働力の供給調整，そして鉱山自治，この四つの機能をもつ同職組合としてあったとご主張なさっています。

そして近代においては，これらの機能を有した友子が，まだ企業が十分行い得なかった鉱夫の雇用とか管理を補完する役目を担ったことに，そもそも友子が発達した原因を求めていらっしゃる。

その雇用と労務管理と友子との関連を通して見たのは，それ以前はまったくなかったわけではないと思いますが，それはあくまでも友子を共済組織と理解してのものであって，そこでの議論は限界があっただろうと，私はいま考えるとそう思います。

友子を同職組合ととらえることで，鉱山業の発展との絡みで，友子の発達や変容のプロセスを体系的に明らかにした村串先生の研究は，友子研究史という範疇で考えた場合，まったく新たな地平を開く研究であったのではないかと考えます。

そして企業が労働者の友子という自律的な社会集団に依存しつつ，安定的な経営を行っていたというこの研究は，いわゆる同職集団の役割を再評価して，近代の労使関係のありようをとらえ直そうとする，近年行われて

いるような労働史研究，労使関係史研究の，いわば先駆的な研究とも言えるのではないか。つまりは，友子研究という枠にとどまらない射程をもっていたのではないかと考えています。

そして，このたび森嘉兵衛賞を受賞された『大正昭和期の鉱夫同職組合「友子」制度』でありますが，ここでは前著の理論的な枠組みが継承されまして，採鉱技術の機械化や労働需要の停滞，労働運動の高揚を背景とした友子の企業内化，友子に対する統制というものの過程が具体的に明らかにされています。

これによって，百数十年に及ぶ友子の通史が明らかにされたという点では，ある意味では村串友子研究の集大成だとは思いますが，同時にこれはまだ開拓の余地が残っている大正昭和期の鉱山の労務管理史研究に先鞭をつける，あるいは布石を打つような研究になるかと思います。

企業が独自の規範や倫理をもった友子という社会集団をいかに統制しようとして，その結果として企業にいかなる新たな労働秩序，企業内秩序が形成されていったかという問題は，これとほぼ同時期に展開されていく飯場制度改革であるとか，福利厚生策を基礎とした労使関係の再編，こういったものを正確に理解するうえでも決して看過しえない問題だと思います。今後，この村串先生の大正期，昭和期の友子研究を土台として，そういった新たな研究がなされていくのではないかと私は考えています。

私は村串先生の研究を正しく理解して消化している自信がありませんので，具体的な内容というより，概説的，概括的な私の意見でありますが，私は村串先生の研究についてこのように考えています。

萩　原　ちょっと土井さんに聞きたいのだけれども，『金属鉱山研究改め鉱山研究』に出た土井さんのレビュー論文「友子研究の現状と課題」を読んでびっくりしたんです。津田さんは僕の学部時代の先生とまでは言えないけれども，僕は津田ゼミに１年間出させてもらったことがあります。津田さんは，もともと鉱山マニュファクチャーというか，フランスのコルベールのもとでの工業化政策とか殖産工業政策を研究されていた人なので

煙害で禿山となった足尾銅山で研究会仲間と（左２人目）

神岡鉱山で最古（安政６年）の友子面附に見入る

日本最後の釧路太平洋炭鉱の見学時に

国連大学研究プロジェクトの仲間による釜石大橋鉱山跡の見学（左３人目）

留学中のヨークシャーの炭鉱博物館訪問時に（右端）

夕張炭鉱博物館の旧夕張炭鉱大路頭にて（右２人目）

す。大塚久雄の弟子で，フランス経済史を専攻されていた。ものすごく多面的に仕事をなさる人で，日本の近世鉱山業に関する論文も書いておられるですよね。

土井さんはレビュー論文の中で紹介しているけれども，津田さんはすごいことを書いている。僕も前から知りたいなと思っていたこと，例えば山師と鉱夫の関係はどうだったのかについて，津田さんは実に大胆な図式をつくっているでしょう。ところが，土井さんの論文を読むと，資料的裏付けはまったくないんだよね。

土　井　そうなんですね。

萩　原　資料がなくて，何でこんな大胆な論文が書けたのかなと思って，非常に不思議でした。（笑）想像で書いたのかな。

村　串　津田さんは友子は江戸初期から存在していたというんだけれども，本当は認めたいけれども，私はそこまで推論できなかった（笑）。

土　井　津田先生は，堀場稼ぎというのを重視するんですね。農村から分離して，専業化した労働者たち，鉱夫ですが，鉱夫が山に共同体をつくって，その共同体が開墾作業，採鉱作業に従事するんだと，この共同体が友子の原型であると断言なさっている。その共同体から経済的な差異が生まれて，金持ちになった富裕層が山師になって，あるいは金子になって，それからこぼれた人間たちが友子というかたちで後々も残っていくと考えていらっしゃるけれども，これを裏付ける資料はないですよね。

萩　原　それでは素晴らしい空想的歴史学になってしまうね。

村　串　それ，基本的には，心情的にそう思いたいのですよ。

萩　原　そうだったらいいなというような願望の表現？

村　串　うん。そう。津田さんの論文読んで，オッと思ったものね（笑）。友子研究で，最初に読んだのは津田さんなんだよ。そう思ったけれども，実証しようと思ったら，実証できない。

萩　原　わたしは，津田論文は読んでいないんだけれども，『武蔵大学論集』に出た論文を。その論文には，資料はまったく挙げられていないん

ですか。

土　井　　挙がっていないですよね，たしか。

萩　原　　何々家文書とか，そういうものも使われていないんですか。そうすると，フィクションに過ぎないということになってしまう。（笑）

村　串　　でも，近世鉱山史というのは，そうじゃないかなという気がしている。市原さんは江戸，近世はあまりやらなかった，近世には行かなかったですね。

市　原　　やらなかったです。

村　串　　だから，それは先ほど言ったように，佐々木潤之介さんがいちおう近世銅山史なんだから，本当はああいう歴史家，近世史家にちゃんとやってほしいなと思うんだけれども，彼は友子なんて成立していないという説だから，資料も探す気がなかったのでしょう。

友子はクラフト・ユニオンだったのでは？

萩　原　　最後に僕は司会役ですのであまり意見を述べるべきではないのですが，一言感想を言わせていただきます。先ほど言いましたように，僕は金属鉱山の研究も炭鉱の研究もやったことがないので完全な素人です。村串さんの本は，最近ようやくちゃんと読むようになったのですが，読んでちょっとショックを受けました。

日本の近代経済史の見直し，いわゆる修正主義，レビジョニズムの動きは，それはもうずっと以前から始まっています。近世史も同様です。もっと古く古代史から全部見直さなければいけないといった動きがずっと続いているわけです。僕の研究分野の労働市場と労使関係の分野は，特に古い議論に引きずられてきた分野ですので，見直しの動きが盛んです。

例えば，これは通説だと言われてきたのですが，日本には札差のようなマーチャントギルドは若干あったけれども，ヨーロッパのギルドみたいなものはなかったといわれてきた。勿論クラフトギルドは存在しなかったと思われていた。ギルドの伝統がなかったために，クラフトユニオンが成立

しなかったというのです。だから，後発資本主義国の日本には，横断的な労働市場は形成されず，縦断的な企業別の閉鎖的な労働市場しか形成されなかった。このように企業別に分断された閉鎖的な労働市場を背景にして，企業別組合，従業員組合，御用組合が形成されていったといった類の議論が，大河内一男から始まって，延々とやられてきました。しかし，このような議論は何かおかしいのではないか疑われ始めた。

僕は，日本の機械工の歴史をずっと調べてきているのですが，機械工について二村さんは，日本には機械工のクラフトユニオンは存在しなかったといってきた。日本には，熟練工が労働組合の結成の核になることはなかったといっている。しかしこの種の議論は，おかしいのではないか。大阪なんかでは，明らかに熟練工が中心になって，強力な労働組合を展開している。鉄工組合は，実に強力でした。

ということで，これまで書かれた日本の労働史の本はかなりいんちきだなという印象をもっていました。隅谷三喜男さんなどもメチャクチャな議論をしている，一番ひどいのは大河内さんだけれども。兵藤さんや中西さんになると，少しいいのですが。（笑）

そんな時に，村串さんの友子研究に接したんですよ。そうしたら，少なくとも明治30年代から40年代にかけて，日本の製造業の労働力人口のなかで鉱山労働者が占めていた比率はかなり高いですよね。そのほとんどの鉱山に，連合組織はなくてバラバラだったけれども，いちおう全国的に友子が成立している。そうすると，日本の労働史をどのように見たらいいのか。非常に強力なクラフトユニオンができていたといってよいのではないか。

一方，大阪とかぽつぽつできあがってくる工業地帯を見ると，そこでは機械工たちが非常に積極的な動きをしていて，日本では労働者階級は未成立だとか，出稼ぎ型賃労働でまともな労働市場は形成されていないとか，そういう類の議論は全面的にそれこそリビジョンしなければいけないのではないかと思っているのです。

ですから，村串さんの本は本当にすごい本だなと思いました。金属鉱山

のなかに友子が存在している。明治の後半期にこれだけの友子ができていたということだけでも，労働関係の研究をやっている人には大きな問題提起ですね。それで本当にショックだったという感じです。

２点だけ問題を出します。市原さんも感じているように，それから武田さんが言われたように，友子はクラフトギルド的な同職組合であり，金掘大工は熟練労働者だったという指摘が，村串さんの本には繰り返し出てくるわけですが，肝心要の熟練の分析が出てこないのです。

僕らが熟練の議論をするときには，必ずワーク・オーガニゼーション，職場組織，作業組織をまず分析するんです。生産工程がどうなっているかを明らかにする。作業組織のなかで分業がどの程度進行しているかを解明し，一つひとつのジョブ（職務）の性格を確定して，そしてジョブ間の昇進とか移動とかを分析した上で，ワーク•オーガニゼーション（作業組織）を解明していきます。

作業組織の表を，一生懸命探してみたのですけれども，この本には出てこないんだよね。（笑）だから，武田さんが言われたように，友子はクラフトギルド的な組織だったと，「的」がつきますが，それを言う時には熟練の分析をきちんとしておかないとだめではないかと思っているんです。

そうなると，このあとは僕の推測なのですが，日本の労働史研究の場合，近世が終わると，明治維新以降はどうも職人を近代労働市場から分離して考えてしまっていて，職人の研究をちゃんとやっていない。それが，日本の労働史研究の大きな弱点になっているのではないか。もしかしたら村串さんの本にも，そのマイナスのネガティブな面が出ているのではないか。要するに，本格的に職人の歴史を研究していない。

もう一つの問題は，金属鉱山の鉱夫を金堀大工と言うでしょう。だから，「大工」という言葉にこだわってみたらどうか。大工だとうんと広がりがあるんですよ。建物を造る建築の大工と，大工というのは基本的に木を扱う職業だから，もしかしたら開坑とか坑道を造るとかいった土木作業，それから築城の時，石を梃子でもち上げたりコロで運ぶとかいった土木作業，

それから金属を扱う大工，金堀の大工，それから製錬まで入ってくるのではないか。開坑，採鉱，土木，建築，そういう仕事をすべて含んで，大工という職業が存在していたのではないか。

そうすると，大工は『建築金工職人史話』という遠藤元男さんの代表作によれば，全国組織みたいなものはないけれども，小さな職人の組織はいっぱいあったわけです。大工の集団といいますか。そうすると，その大工集団のなかの一環として，もしかしたら金掘大工の歴史が浮かび上がってくるかもしれない……。これも津田さんと同じように資料抜きの単なる想像でフィクションに過ぎないのですけれども，もしかしたら友子の成立も説けるのかなという感じをもっているんです。これが説けたら面白いなと。

それから最後にもう１点。近代的なものはよくて，封建的とか前近代的なものはダメだといった議論についてです。松島さんは，そもそも労働者というのは要するに社会の脱落者とみなしている。特に鉱山で働くやつは，過去を話したくない前科もちばかりだ。それが労働者というものだ，とみなしておられる。

本当にそうなのですかね。労働者は脱落者である，だから，彼らがつくった友子はヤクザの集まりみたいなものである。このヤクザの団体みたいな組織を，戦後結成された労働組合が近代化していくことを期待した。古い職人組織みたいなものは，いずれは消滅していく，古いヤクザの組織みたいなものは近代化する必要がある，というのが松島先生のパラダイムなわけです。松島さんは，中小企業論においてもそうで，遅れた中小企業の経営を早く近代化して変えていかなければいけないとかいっておられました，根っからの近代化論者なのです。

この点は，村串さんの議論の場合も共通している。村串さんは，友子や納屋制度の封建的な性格は否定するんだけれども，封建的なものを否定的に評価する点では講座派的なのです。古い社会集団でも，近代になっても残っていくものがある。近代の市場社会というのは，もともと限界があるからです。近代社会をそんなに明るく見てはまずいのではないか，と僕は

思っていて，古いタイプの組織に支えられて近代社会も何とか社会としてやっていけるのではないでしょうか。

それでぼくは市原さんの議論に賛成なんです。以上，ちょっとしゃべりすぎですけれども，そんな印象をもちました。

武　田　大工の話は，宮大工を例にとれば，江戸時代からかなりしっかりした同職組織があります。それから，私の知る範囲だと，20年ぐらい前に岡田与好さんが，日本の労使関係の生成史に同職集団がいないという定説は間違っていると短い研究ノートに書いていて，あとは東條さんですね。東條由紀彦さんが，同職集団こそがコアだというんだけれども，あの人の議論はとにかく難解なので（笑），先になかなか進まない。でも，そういう議論は出てきているとは思います。

村　串　いま東條さんの話が出たけれども，東條さんは私が聞いている限りでは，友子の研究をやりたかった。しかし，私の本を見たら，もうやりたくないと。それで，女工さんのほうにいっちゃったという話を聞いているんです。

彼が私の本の書評のなかで，結局私が訳のわからない何とかギルド的何とかと言っているけれども，ああいう言い方はやめて，友子はクラフトユニオンと明確に規定したほうがいいんじゃないかと批評しているんですね。

今の萩原さんの議論もそうなんだけれども，そのようにして大騒ぎしたほうが注目されたかなという気はしているんです（笑）。ただ，そういう議論は私はあまり得意じゃないというかね。非常に禁欲的になってしまって，自分ではあまり理論的に何か言いたくないというのがあって，個別の推論はいろいろやるけれども，日本の労使関係研究のなかでの位置づけだとか，これこそが何とかだとかいった議論はあえてやらないで，クソ実証主義とでもいうのでしょうか，これはどうか，これはどうかと各論をつめていきたい。

だから，私の研究を萩原さんみたいに言ってくれるのはむしろ大歓迎で，

それはクラフトユニオンとして規定したほうがいいんだと，友子はそういう面を持っているというか，そんなところがあります。

萩　原　ただ，明治後半期の労働市場，雇用労働者のなかで鉱山労働者が占めていた比重は非常に大きいですから，石炭はちょっと別にしても，金属鉱山でほとんど友子が結成されていたというのは大きいですよ。ちょこちょことあそこに何人か友子がいたという程度だと，あまり大げさに言うなということになってしまうけれども。

村　串　そういう理論づけの勉強はあまりしていなかったので。

友子の組織率をどう見るか

土　井　東條先生は友子も研究しているんですけれども，友子ですら，３割しか組織しえていなかったと論じていらっしゃるんですよね。そこのところはは今日村串先生からもお伺いしたいのですが，友子の組織率は３割と先生も論文の中で書いていらっしゃるんですよね。

これの出典というか，人数が書いてあるのは農商務省の友子同盟に関する調査から引いてきたデータだと思うんですが，あのデータには一つ問題があって，たしか大正４年，1915年の資料なんですね。それで，その前後に鉱夫数が第１次世界大戦の好景気でグーンと上がっているんです。

ちょっと調べてきていまして，大正３年時で鉱夫総数が９万人だったのですが，大正５年になると一気に増えて13万人になって，６年になると16万人，そして大正７年も16万人。そして坑内夫だけに限った数を見ても，大正３年だと４万人しかいなかったのですが，大正５年になると７万人。そして，６年になると８万人まで増えるんです。

そして，あの農商務省のデータというのは，一気に増えたあとに作られ

た資料なんです。そこから現在の全体の鉱夫数で割って，友子が何パーセントの割合で組織されていると算出されていると思うんですが，これはちょっと問題があると思うんです。

仮に農商務省の資料に出ている友子の総数を，大正３年の坑内夫の総数で割って出してみると，その組織率が３割どころか７割になるんです。友子は，友子に取り立てられるというか，加入してから３年は修業期間として，正規のメンバーとして認められませんから，それを考えても，もうちょっと組織率は高かったのではないかと私は考えるのですが，いかがでしょうか。

村　串　明治時代というのは坑内夫の中心的なメンバーは，みんな友子に入っていたと言って間違いなくて，それが鉱山労働力全体の何割ぐらいになるかというのが問題なのです。坑外夫あるいは坑内雑夫なんかも含めて計算すると，熟練者層は鉱山の場合はもともと江戸時代からそんなに多くないので，つまり，外延が広がったら組織率は落ちるに決まっているのです。いくつかの鉱山は調べて見たのですが，鉱山によって熟練工の比率もずいぶん違っているような気もするし。

萩　原　労働力統計は，明治期は何とか得られるでしょう，人口統計のほうは。

土　井　そうですね。ただ，友子の総数というのが，数で出てくるのが農商務省の調査しかなくて，農商務省の資料は大正９年ですね。大正９年の資料のなかに，大正７年時の友子の総数が出ているんです。

村　串　そういうのはあまり信用できないのでないでしょうか。ただ，一つの鉱山のなかで何人友子が組織されていたかというのはわかる。例えば『鉱夫待遇事例』には，例えば何々鉱山に何人友子がいたというデータが出てきますよね。それで全体の鉱夫数と友子組織人数を比べると，そんなに友子加入者は多くないんですよ。

ちょっといま記憶にないけれども，あれは大ざっぱな事例調査だから，たしか50％ぐらいだったといっていた気がするんだけれども。

土　井　　それは採鉱夫とか支柱夫，坑内夫に限っても50％ですか。

村　串　　全部含めて。そして友子に入る資格もルーズで，クラフトユニオンという規定に私が抵抗しているのはそういうことなんだよね。入る資格がルーズで，つまり準熟練と周辺の連中も入れてしまえというのが，時代が新しくなればなるほどそうなってくるわけで，大正期なんかかなりそういう傾向があるのでね。

だから，足尾の場合も，雑夫を友子に入れちゃったとかあったでしょう。

萩　原　　今の点はちょっと詰めなければならないところだね。詰められたらね。

武　田　　土井さんが出された問題が，友子の組織率が鉱夫数が増えたときに落ちたとすると，友子が熟練労働者の供給に機能を果たしていないということになるから，それは村串さんの説に対して反証になりますね（笑）。

土　井　ただ，この時期は資料を見てみますと，どうも九州の炭鉱夫が多く金属鉱山のほうに流れてきているらしいんですね，採炭夫が採鉱夫として。そして，九州の炭鉱夫というのは友子に入っていないんですよね。それで，その組織率がグッと下がった可能性も一つ考えられるとは思います。

武　田　　いや，そういうことではなくて，金属鉱山における坑内の熟練鉱夫が基本的には友子に組織されていて，組織率は例えば半分かもしれないけれども，熟練形成とか，あるいは自主的な統制というところでは，友子は機能しているという村串説を基本的に承認した場合には，そこから熟練者が供給されている仕組みが持続していると言えないとまずい。

土　井　　仮に，採鉱夫，坑内夫の３割か４割ほどしか友子が組織できていないのであれば，それ以外の７割近くは，友子という組織を通じなくても熟練というものを獲得しえていたという話。

武　田　　いやいや，そうではなくて，村串さんは，その７割は不熟練だろうという話をしているのでしょう。

土　井　坑内夫，採鉱夫のみじゃなくて，雑夫とかも含めてということですか。

村　串　九州から，炭鉱から流れていったやつも，私は友子に吸収されていったと思うの。つまり，そうでないと金属鉱山でやっていけないという雰囲気はあるわけ。昭和ぐらいになったら非友子の熟練鉱夫は出てくるから。ただ，大正の例の大不況までは，要するに「お前は九州から来たんだから，友子に入れ」って。少しは地下で働いた経験があるんだから友子に入れっていって，それで喜んで入ったと思うな。

北海道はそういうのはありませんか。北海道はなかったけれども，常磐にはずいぶんあったのでは。常磐も初期は九州からだいぶ来ている。

大正期に炭鉱からそうとう金属鉱山に入っている。好景気だから，そうだと思うけれども，みんな金属鉱山に入っちゃったんじゃない？

武　田　採鉱夫に入るんですか。

市　原　あまり考えにくいですね。

村　串　それは採鉱技術を，友子に入ってほどほどに身につけていくという。

武　田　その身につけていくプロセスを教えてもらいたいのですが…。

村　串　だから，それがないんだ。資料がないんだよ。

採鉱技術の近代化と鉱夫の熟練の変容

萩　原　クラフトギルド的という場合，クラフトというのは熟練職種という意味ですからね。だから職業の性格として，金属鉱山の採鉱夫場合によっては炭鉱夫も含めて，採鉱夫というのは熟練職種である。少なくとも，機械が入ってくるまでは手工的な熟練工であった。そして機械が入ってきたら，その手工的な熟練がどのように変容してきたかということが問題になります。

土井さんは「熟練の崩壊」という言葉を使っているのですが，僕はその

点は注意しなければいけないと思っています。機械が入ってくるとすぐに熟練が解体するとか崩壊するという議論は，世にたいへん多いのですけれども，これはものすごく危険な議論ですよ。むしろ，機械化が進むにつれていっそう熟練が高度化していく場合が多いのです。僕が見てきた限り，ますます熟練が高度化していくケースの方が大部分です。

武田さんも『日本産銅業史』のなかで指摘されているのですが，ロックドリルが出てきて発破で鉱脈を崩すという技術が入ってきた時に，岩盤の硬さとか，鉱脈の硬さだとか，鉱脈の曲がり具合とか，いろいろなことを知っていないと，どのくらいの穴を開け，どのくらい奥まで，どういう角度で掘って発破をかけるのか，わからないわけですよね。それは熟練工だけが知っている。そこに熟練のポイントがあるといわれている。

そうすると，ロックドリルで穴を開けて発破をかけるという段階と比較して，それ以前の手掘りの金堀大工の場合は，熟練とは何だったのかというのが問われてくるのです。

武　田　今の点は私も気になっていたんですけれども，18世紀の半ばから19世紀の初めぐらいまでには，友子は成立していた。そして，その基盤は熟練であるというときの熟練の質と，明治期に確立したというときの熟練の質は違うはずなのに，同じように議論されている。この熟練の質的な転換に，友子が何の摩擦もなく持続できたのかどうかは気になりますね。熟練の質の変化をどう受け止めたらいいのか。

村　串　資料がないせいもあるのだけれども，さらっとやり過ぎたかなという気がするね。気持ちとしては，そのときどきに熟練というのは，生産過程が客観的に与えられたなかで，そこで機能していく。それぞれの時期に，労働力が生産性を高めるための技能の蓄積が必要になってくるんですよね。だから熟練の内容は，それぞれ時代によって変化しているだろう。

ただ，いま問題になっているのは，手掘りから機械に移っていくプロセスです。少なくとも，削岩機についてはそうですよね。だから，削岩機が

与えられたときに，旧手掘り型の熟練とは別に，新しい機械的道具というか単純な機械の導入とともに新しい熟練が形成される。ごく一般的にはそうだと思います。

萩　原　まず機械化する前の鉱山の労働組織というか生産過程というか，これは銅だけに限らず，金も銀もみんなそうなんだけれども，今までにわかっていることは，製錬所は金属鉱山の近くに立地している。例えば佐渡の場合，鉱石を採って選鉱して，製錬して，一種の地金みたいなものをつくって，さらに銅でいうと粗銅にして，江戸なら江戸に持ってきて，あと銭座でそれを銅貨に鋳造していく。だから，製錬所と鉱山がくっついていた。

もう一つは山師との関係ですね。鉱山業全体をマネジメントするのが山師である。開坑から精錬まで。しかしどこまで山師が指示していて，どこから鉱夫に任されていたのか，そこがポイントなのです。仕事は請負ですよね。そうすると，どこから請け負うのか。ピットでこういう方向に掘っていけというところまで山師が指示をして，ただその指示に従って金堀大工がやっていたのかどうか。

山師の指揮下にあったとしても，僕なんかから見ると採鉱夫の熟練は相当なものです。つまり専門的に言うと，段取りとか工程設計とかを，労働者である採鉱夫が全部やらなければいけないわけですよ。ですから，ベテランがやるのと素人がやるのとでは生産性がまったく変わってきちゃうんです。素人だと，きっと変な方向に掘っていったりするだろう。そのへんは是非知りたいところなんです，鉱夫がもっていた熟練の性質を解く鍵だからです。たぶん相当の熟練が必要だったのではないかと思うんだけれども，山師との関係がポイントなんですよね。

村　串　だから，鉱山経営で，例えば足尾でもほかでもそうだけれども，やはりきちんとした技術者，工学士の技術者がシステマティックに採鉱を切り羽まで，大ざっぱな計画でやるんだよ。小さい鉱山は山師に任せて，山師の知識で適当に坑道を掘ってバーッとやるけれども，大鉱山の場

合はやはり計画的な採鉱計画があって。

萩　原　石油の探鉱だって，今では電波でやるとか，いろいろなすごい近代技術でやっているみたいだけれども，少なくとも戦前のレベルでいっても，ボーリングとか見た感じだけではやっていないと思うんです。鉱山学という学問の成果にもとづいて，このへんにこういう鉱脈がこのように走っているだろうとか推量できていたのではないでしょうか。

村　串　うん，だから基本プランみたいなものがあって，あと細かなところはそれこそ熟練の人が，この何とかの走りぐあいで，計画はこうあったけれども，こっちに行っちゃうとか，現場はそうだと思うけれどもね。

土　井　しかも，鉱脈鉱床の場合は，鉱脈全体がこっちの方向に進んでいることはわかっても，実際の各切り羽レベルになると，急に太くなったり細くなったり，その場で臨機応変にしないといけないんですね。

だから，急に太くなったら，それなりの堀り方をしないといけない。発破のかけ方，その火薬の量であるとか，どういう手順で掘るかとか，結局その鉱脈鉱床の場合は現場の人間が，つまり鉱夫がその場その場で判断して実行しないといけない。そこに熟練というものがそうとう出てくるのではないかと思うんですね。

だから，採鉱計画という大きなものは経営側の現場員とか技術士ね。

萩　原　江戸時代は山師ですよ。

土　井　山師ですね。でも，山師がやっていたころも，実際掘っていくと，そのつど鉱脈の状況というのは鉱脈鉱床の場合は非常に変わっていく。だから，それによって堀り方を判断して実行するということが，やはり鉱夫に求められた能力だと言えるのではないか。

だから，この熟練というのは，まったくの手掘りの時代も，発破を使った採鉱に変わったときも，それは変わらずあったのだろう。おそらくそれは削岩機に代わっても，続いた熟練だと私は思います。

市　原　鉱山とか炭鉱というのは，戦前のかなり早い段階から大学出の技術者がある意味で最も多い分野ですよね。だから，大学出の技術者た

ちが入ってきて，明治の早い段階から，おそらく測量とか地質とかの人たちもかなり入っていますから，計画を立てて開発をして掘っていくようになって，さらに機械化するようになってくると，技術というものを会社側が握るようになってくる。そのようにふつう考えると思うんですね。

それまでの段階だと，いわば技術に当たるようなものを山師を含めた鉱夫がもっていて，友子の親分や，熟練した友子の鉱夫がそれを持っていたから，大卒の技術者などが入ってきて，さらに機械化が進んで転換するまでは，おそらく技術や技能は一貫して友子が握っていた。村串さんはそういう認識ではないかと思ったりしたんです。

それがいいかどうか別にして，大きな転換があるのは産業革命期以降の技術を，近代的な技術を身につけた鉱山エンジニアたちが握るようになった時だという認識なのではないですか。

武　田　特に異論があるわけではないけれども，石炭は知らないですが，非鉄金属鉱山で大学出の技術者が入ってくるときに，製錬所の設計は別にすると，彼らはせいぜい通気の坑道とか運搬の通洞をボーンと掘ることはやれても，最初の時期は切り羽のところの設計はまったくできない。通洞からその切り羽では，それぞれに組ごとに分けて，あとはお任せというのがたぶんふつうなんです。

だから，そういう状況の捉え方になるのですけれども，通洞を掘るのはこの本でも出てくるようにトンネル工事と同じですから，岩の形とか鉱脈の形態に関係なく，ある設計に沿って真っすぐ掘れるかどうかという技術です。その技術をもっている人たちも，ここでは友子なんです。

熟練した通洞堀りの開削工といわれるような人たちが一方にいて，それから同時に切り羽に入っていける採鉱夫とか，支柱夫がいる。おそらく，相互に代替可能な技術をもっていたと考えないと，足尾と碓氷峠を往復するような鉱夫が出てくることは説明しにくい。

そのときに，友子を規定しているコアの技術が，どちらの技術なのか。切り羽の技能なのか，それとも単にトンネルを掘れることなのか。トンネ

ルを真っすぐ掘れるというのもけっこう大変な技術だと思うんですけれども，そのどちらを見るかによって，近代的な技術体系に対して従属性をもつ，技術者の指示通りできるのを技能と見るのか。それともそれとはちがい，裁量権を与えないとできない技能を熟練と見ているのかによってたぶん違ってくる。

たぶん，時代によって少しずつ変わっていって，裁量権をもっているとか，熟練をもっていると言いながら，実は中身が少しずつ変わっていると見ないとまずいのではないかと思います。

熟練の両面性 ── 採鉱の知識と手わざ

萩　原　それともう１点，熟練という言葉を使うときに気をつけなければいけないと思っているのは，手工的熟練なんて昔は訳していたのですが，マニュアル・スキル。この種のマニュアルな熟練は，ほかの職人と違って採鉱夫の場合，たいして必要ないんですよ。要するに，つちとたがねと矢が主要な道具で，それほど難しい作業ではないのです。

だから，彼らがもっていた熟練の内容は，採掘計画とか段取りとか，どうやって掘っていったら高い収入が取れるのかといったことで，生産性の高い掘り方に関するノウハウとか，鉱山についての知識に尽きるのではないかと思っている。その種の知識を，経験をだんだん積み重ねていって獲得する。マニュアルスキルは，それこそある程度の体験があれば誰にでもできる。しかし，鉱山の切り羽をどういう方向に掘っていったらよいのかなどといったことは，かなり経験を積まないとそういう能力は身につかない。

大工さんと同じですね。大工さんの場合，マニュアルスキルが必要なのは，カンナ削りだけかもしれません。だから，左甚五郎の神話というのは，カンナ削りから出ているのです。だけど，それ以外のクギを打つとか，ノミで削るとかはたいしたことではないんですよ。結局，どういうふうに家を組み立てていくか，これは絶対に大工でないわからないことで，我々素

人が家を建てたらすぐに台風で倒れてしまいますよ。力のいろいろなバランスの取り方がわかっていないからです。

だから，小池和男さんがよく言っておられるように，労働には手作業以外に，作業の段取りを決めるとか異常に対して適切に対処するといった知的な面でのスキルが伴わねばならない。鉱山の鉱夫の場合は，マニュアルスキルよりも，そういう採鉱過程のマネジメントとか，採掘計画といった面でベテランにならないと，仕事ができなかったのではないでしょうか。そのノウハウを持っていたから，彼らは強かったのではないか。

武　田　それだと階段掘りに移った明治末ぐらいで，ほとんど無意味化してということになりますよね。

萩　原　そうそう。

土　井　いや，しかしマニュアルスキルではない熟練のかたちとしても，岩盤をどう砕くか，どういう砕き方がもっとも効率的かというのは，鉱夫にとってはすごく重要な問題で，例えば失敗をすれば，それだけダイナマイト，発破代を出さなければいけないわけで，うまい熟練鉱夫はそのときどきの岩盤に応じたもっとも効率的な砕き方を知っている人間たちだと思うんです。

そらが上手な人間はどんどん掘れるし，掘れることによって鉱石も取れる。坑道掘進の場合は，どんどん坑道を延ばせる。そういう熟練だと思うんですね。だから，そういう熟練であれば，階段掘りに転換してもやはり残り続けると私は考えています。

市　原　炭鉱なんかの場合には，熟練のなかに保安というのがかなり大きく入ってくるんです。結局，非常に危険ですから，掘り方によって天井が落ちてきたりそういう危険性がありますので，いかに安全に掘っていくか。

いま岩盤に対する掘り方という話がありました。それはそうなんですけれども，ある時期までは坑道をどうやって設計していくかとか，炭鉱の場合ですと鉱脈がどういうふうに残っているかというのは，学校出のエンジ

ニアよりは，いわゆる頭領とかそういう人たちの技術というんですかね。だから，金属鉱山もそれは同じようなことがあるのではないですか。

土　井　それはたぶん抜き掘り，タヌキ掘りと呼ばれるような掘り方が続いていた時期だと思うんです。それは足尾銅山みたいな大規模鉱山では，もうだいぶ早い時期にやらなくなって，その横坑道をバーッと引いて，縦坑道でガーンとやって，そこだけ掘っていくという掘り方に変わっていますからね。

市　原　その段階で友子のもっている技能がかなり変わってくるということになるんでしょうかね。

萩　原　湧水の処理とか，鉱石の搬出とか，全体の坑内の労働を誰がマネージ（管理）していたのですか。

武　田　全体といっても，足尾ではマネージできるのは通洞までですから。ちょっと違うような感じがします。

話題を先に進めたいのですが，仮に熟練があった。それに対して，友子はそれなりの養成機能をもったということまで言えるとした場合にも，まだ村串さんの論理にはわからないところがあるのです。クラフト的なユニオンであるとすると，これは労働の供給規制になるわけですよね。したがって，経営側から見ると，労働需要が急拡大している時期にそれに頼るというのは，論理的にそもそもおかしくないでしょうか。

村　串　クラフトのところをぐいぐい押していくと，だからユニオンになったらよけいそう言えない。だから，クラフトユニオン的な性格が弱い同職集団。

萩　原　村串さんの議論でいくと箱元交際を通じて，他の鉱山から場合によっては労働力を引き抜ける。鉱量がだんだん減っていく山もあるし，人手が足りないところもある。その場合友子に頼んで，少し余っている所から引き抜いてくれよと，そういう機能があったという事でしょう友子には。だから，会社のほうもそれを頼りにする。

武　田　ミクロに各鉱山で見ればそうかもしれないですけれども，マ

クロで見ると，あの時期は明らかに鉱山労働者は増えています。非鉄金属鉱山でいうと，技術がかなり上がる製錬は増えていませんが，坑内労働だけは増やさざるを得ない時期です。

ですから，そういう時期に熟練技能の養成を担うような労働側の組織に経営が頼らざるを得ないとすると，そこで起こることは，経営側に交渉力がありませんから，高い賃金を支払わざるを得ないか，労働力の供給不足に直面するか，それを突破するために革新的な技術で熟練そのものを変えてしまうか。そういう方向にいくのが，論理的には素直なように思うのですが，そうなっていない。

むしろ，そういう状況だからこそ，友子は重要だったんだという言い方をしているんですよね。

村　串　だから，私はクラフトユニオンと言えないのは，例えばイギリスのブラザーリングなんていうのがありまして，友子と似ているんですよ。クラフトユニオンにならない前に，かなりルーズな集団があるんですよ。でも，それはけっこう団体交渉みたいなことをやっているんですよ。だから，労働組合だと言っている人もいるんですけれども，そうは言っても労働組合でないような，アーノットやホブスボームが，ブラザーリングを労働組合の原初形態とかと言っているんです。

それはそれで友子も労働組合の原初形態だと言ってもいいかもしれないけれども，友子はブラザーリングみたいな交渉力は何もないんですよ。そういう主体性というか，自治的なグループではありながら，労使交渉でユニオン的な性格はもたない。しかし，徒弟制度で，新入りが来ると一生懸命指導して技能養成をする。

その技能がどの程度の技能かといったら，いろいろピンからキリで，非常に多様でルーズだったのではないか。例えば支柱夫なら支柱技術とかありますよね。それは採鉱の手掘りよりあるかもしれない。手掘りは手掘りで，鉱夫の熟練性というものは例えば機械工のような熟練性ではなくて，ただ経験がすごく生産性に影響する。

ここのところが，あまり熟練的ではないけれども，熟練を重ねれば生産性が高い。だから，いわゆる熟練的な採鉱夫を集めたがる。

萩　原　その場合,「熟練＝マニュアルスキル」と理解すると，本当に熟練を間違ってとらえてしまうことになる。

村　串　だから，そこのところは……。

萩　原　マニュアルスキルなんかほとんどなくても，すごく高度な熟練ってあるんですよ，工場の労働では。

武　田　今の例でいえば，実際の切り羽でノミとツチで穴を掘るのは若造で無経験なやつでもよくて,この方向に掘れと言えるのがたぶん熟練,そういう話だと思うんです。

萩　原　そうですね。

村　串　質の高いね。

武　田　だから，それは実際に作業しながら，こういうところはこのように掘るんだという教育ができるので，熟練形成はできそうな気もするんですけれどもね。ただ，そこの姿がとにかく見えてこない。

市　原　武田さんもおっしゃいましたように，徒弟制度というのは育てる制度でもあるけれども，一方であれは育てるのを抑制するものですよね。

村　串　自分の労働を高く売るために，固定化するためにね。

市　原　ですから，徒弟制度で熟練鉱夫を養成するということで，村串さんの議論の特徴は，友子というのはものすごく親経営的というか，経営側との間に非常に矛盾が少ない。だから，親経営的な同職組合であるという議論なんですよね。

だから，あえて積極的に評価すれば，そこに日本の労働者集団の特徴がある。

武　田　本質的に近い関係だいうことですね。私はそのように読まなくて，これが例えば変化のスピードがもっと遅ければ，もっとまともなクラフトユニオンになったのに，スピードが速すぎたので，その性格を日本

は壊したんだという主張なのかなと思ったんです。

村　串　深読みの，うれしい読み方，読まれ方だ（笑）。

鉱山経営の近代化と友子

萩　原　私はむしろ先ほど言いましたように金堀大工という言葉にこだわるのですが，大工職は立派な熟練職種で，大工の仕事は一人ではやれないんですよ。一人親方といっても，親方なんです。だから，必ずチームを組むわけです。そうでないと，家は建たないんですよ。

だから，鉱山の労働組織，作業組織もやはり親方みたいな人がいて，それが採鉱夫で，やはりチームがないと，一人で岩壁を崩して鉱石を運搬して，水が出たらそれを処理してなんて，そんなことをやっていたらめちゃくちゃに生産性が低いわけだから，ちゃんと作業組織ができてくると思うんです。

しかも徒弟制で後継者を養成していかなければいけないということになると，これは基本的には請負制以外にやりようがない。請負制でやるしかないわけです。ところが，近代になって企業ができてくると，最初は鉱山の経営も請負をそのまま引き継いでやってみるけれども，だんだん企業自らが全体を経営，管理をしていくことになってきたときに，古い請負作業のシステムは何とかしなければならない。企業にとって邪魔になってくる。

ところが，それをどうやって切り替えていくか，これは難しいですよね。だって，共済組織をもっていて，しかも徒弟制をもっていて，請負でお前らに任せるとなっている。ある意味で兵藤さんが言っている間接的な管理でやれないことではないんだけれども，需要がうんと増えてきて，企業間競争もあってコストも下げなければいけない，生産性も上げなければいけない。そういうときに請負制でやっていたら，とてもではないけれども対応できないので，作業組織も会社の方針に沿ってだんだん再編成していく。

そのとき，友子はどう対応するのか。クラフトユニオンに成長するか，つぶされるか。あるいは，つぶされなくても企業と共存して存続していく

か……。

アメリカの大企業では，substitution policyというのですが，組合がもっていた機能を全部会社が吸収してしまって，組合を脱け殻にしてしまう。そうすると，従業員はもう組合には入らないわけだね。それでつぶしてしまう。

たぶん日本でも企業はそういう対応をしたんじゃないかな。労働力不足だから，どんどん生産工程の近代化をやり，社内養成に切り替えて，福利厚生も充実させて，友子はいらないと。

土　井　鉱山は1910年代に具体的にやっていきますよね。それ以前というのは，鉱山の特徴的なところは，請負の話に絡んで言いますが，友子を考えるうえでも鉱山はやはり飯場制度は無視できないんですね。

基本的に作業を請け負ってやっているのは，友子ではなくて飯場頭なんですね。もちろん飯場頭が友子の一員だったりもするので，まったく分離した組織ではないですが，友子を請負団体，請負組織として考えてしまうとごしゃごしゃになってくるので，これは分けて考えるべきだと思います。

作業を請け負わせるのは非効率的で合理的でないので廃止されていっても，それはあくまでも飯場制度の作業請負を廃止するかたちで鉱山は進んでいくので，そのときに友子は直接請負団体ではありませんので影響は受けないですよね。

ここは議論がいろいろ複雑になってくると思いますが，では飯場頭は何者なんだとかね。もとをたどれば，同じ山師制につながっていくものだと思いますので，そこから分離したもの。

萩　原　共済機能の方はどうですか。企業が近代的な形態になっていくにつれて，社宅を作ったり，福利厚生施設を整備していく。日本の紡績業界には，世界に冠たる福利厚生施設をつくった企業が多いのですが，背景にあるのは極端な労働力不足ですよね。

武　田　立地条件によるんじゃないですか。足尾みたいなところだとたぶんかなり早いですが，秋田で町場に近いところだと通勤工は多いです

し，それなりの商業施設があるので，そっちは出てこなかったりするとか，それはケース・バイ・ケースですね。

市　原　北海道の山の中の炭鉱なんかですと，すごいですね。福利厚生施設。よく「本当か」と言われるのですが，もうテニスコートまで会社がつくった。会社というか，青年団がつくるんですが，鉱夫たちがテニスを楽しんでいるとか。

萩　原　紡績は，後に東洋紡になる大阪紡績の工場なんかでも，大阪の町の中につくったのですが，しかし通勤工をできるだけ避けるというので周辺から労働者を集めて全寮制を敷く。要するに深夜業をやるから通勤工だと困るんだよね。だから，福利厚生が非常に整ってくるというか，女の子だから，下手に扱ったら社会問題になってしまう。

だから，友子はどうなっていったのかなと思って興味深く見ています。共済機能と，それから熟練工を養成する技能訓練の機能，この二つのうち，どっちが残ったのですか。共済で残ったんですか，単なる親睦団体で残ったんですか。

市　原　友子の共済というのは，どれだけ実質的な意味があったのかという気がするんですよね。一宿一飯というのも，本の中でお書きになっていますが，実際にけがをした人間が山を歩くわけですね。これは大変なことですし，みんなでお金を出し合って，係の人がみんなのところを回って袋に小銭を入れて集めて渡す。これでどのくらい意味があったのか。そういう点では，いわゆる助け合いぐらいの意味しか，ひょっとしたらなかったのかもしれないという気はしているんです。

会社のほうで共済組合とかをつくってきますと，とてもそれに対抗できないというものだったんじゃないかな。

村　串　公的な救済制度と，それから企業の共済があるわけでしょう。それがないときは，例えば明治前期なんかを見るとやはり細々とではあるがすごく機能している。その機能の仕方が強烈ですよね。一つの集団を形成していた。

ところが，それから鉱山が近代化して，早いところは明治30年代から共済組合をつくって少しずつやってくる。それから公的な救済制度も出てくる。だから，そういうのと並行して絡みながら友子の共済はやっているのは明らかなんですよね。

共済の額とか何とかはだんだん少なくなってきて，明治時代は30円だったのが，大正になっても全然変わらない。会費も変わらないとか，実質的にカバー度は落ちてくるけれども，結束していく集団の大きな物的根拠，物質的な根拠みたいなものにはずっとなっている。それが戦後にもそういうものとして残っていく。つまり，一種の友子の形骸を支えるものとしてなっていっている。

萩　原　村串さんの研究で明らかになった，労働市場を規制していたという供給規制は基本的に正しいと思う。徒弟制と，鉱山の生産現場の段取りを自分たちが設定していたとか，技能養成をやっていたとか，この二つが友子の中核機能だと思う。ピット間の移動とかはあったと思いますし，他にいろいろな事業をやっているけれども，中核は徒弟制だと思うんです。

イギリスの機械工組合でもトラベリング・フィーというのがあって，機械工が引っ越しをする場合，ロンドンの本部から，違う町へ移る場合手当が出るんですよ。だけど，そういう共済的な機能は，誰かがシステムやメカニズムを考案してつくったのではなく，最初はそういう素朴な助け合いから始まって，だんだんクラフトユニオンの形ができあがってくるわけですよ。

しかし，中核は明らかに徒弟制による供給規制で，徒弟制を経なければイリーガルでクローズドジョブだから仕事ができない。それはすごい組織だと思う。友子は，事実上それに近かったのではないですか。

村　串　友子でないと仕事ができないのは本当かどうかというのはあるけれども，やはり変な人が来たらいじめるに決まっているわけで，そういうふうにして友子集団を守るというか，集団の機能を守るというのはあったと思う。

ただ，そのときに熟練の養成というものの度合いがどの程度のものだったか。それから，熟練の程度そのものはどの程度のものだったのかというのは議論があって，鉱山によっても違うし，大小によってとか，手掘りから少し機械が入ってくるとかいろいろあるけれども，そういうのを飲み込んで集団として，友子集団として友子以外の人には働かせないと，そういう結束力がものすごく強かったと思います。

萩　原　古老というか，そういう人からの聞き取りはやってなかったの？

これはいっさい資料に残っていないことなのだけれども，アメリカのチームスターというトラックの運転手の組合は暴力団に近いと言われている。僕はチームスターという組合はわりと好きな労働組合なのです。（笑）

だから，滞米中にいろいろチームスターのローカル（支部組織）を訪ねて話を聞いたんだけれども，組合員でない人が運送業でトラックの運転手をやっていた場合はどうするのかと聞くと，追い出しますよと言うんですね。高速道路で崖から落としてしまうと言うんですよ(笑)。荒っぽいなと思ったけれども，「あいつ，もぐりだ」といったら，要するに安く請け負ってやっているからね，もぐりは。

村　串　鉱山の場合は，よそ者がパッと来て働けるという労働システムではないです。やはり組織的なものだから，友子はそうした規制力をもっていた。

萩　原　友子があったら，少なくとも元老のオーケーをとらないとだめでしょう。坑内に入って仕事をするとき。

村　串　未熟練は未熟練なりに雑夫で適当に自由にやっていたけれども，坑内の採鉱とか掘削とか，いわゆる基本的な鉱山労働については友子が支配力をもっていたのは，かなりの程度そうらしい。時代がさかのぼればさかのぼるほど。江戸時代なんか，絶対にそうだよ。

市　原　友子でない熟練採鉱夫もいることはいるわけですよね。本の中でも，全員が友子だというわけではないと，たしか書かれていたと思う

んですが。

村　串　それは時代の問題でしょう。昭和期になったら，友子の規制力は著しく落ちてくる。

市　原　昭和期はそうですけれども，かなり早い時期。

村　串　大正期。

市　原　いや，明治とか，全員が友子というわけではたぶんなくて。

村　串　職種によって。

市　原　全員友子だというように考えるべきなのでしょうか。私はどうしても炭鉱をやっているものですから，炭鉱だと友子の数は限られていますからね。

村　串　足尾とか，別子とか，ああいうところでは熟練鉱夫は全員友子だったと思いますよ。

武　田　私がちょっと微妙だと思っていたのは，村串さんの資料の読み方だと，熟練鉱夫と書いてあると，そのままイコール友子だと見なしているところがある。ただ，実態からいって飯場制度と友子が足尾みたいにくっついているところでは，繰り込みをやっているのは友子の頭なのか飯場頭なのか，実はよくわからない。

そうすると，現場の裁量権をもっている理由は友子のメンバーであるからなのか，飯場頭として請け負っているからなのかというのは，区別が現実につかないわけですね。そのときに，公式組織としての飯場頭が実際に動いていて，一種の秘密結社みたいに友子が存在しているだけだとすると，これはどっちを議論すればいいか，よくわからないところがあるんですよ。

仮にそれが完全に一致していると言えれば，問題はないんですけれども。

土　井　私はむしろ，飯場頭と友子というのは一つの組織ではまったくなかったと思うんです。なぜかというと，友子の重要な機能として，私は鉱夫の移動の保障があると思うんです。いわゆる鉱夫の遍歴を友子が下支えする。

あの当時は非常に労働力不足で，どこの鉱山も鉱夫を欲していましたか

ら，鉱夫は鉱山を選べたわけです。だから，労働条件が悪ければ，ほかのところに渡ることも実際に行われていた。そういった企業側からすると不当な移動，逃亡というものでさえ，友子は支える。これは明らかに飯場頭の利害とは一致しないと思うんです。

飯場頭はむしろ，もちろんほかの鉱山で働いている鉱夫の逃亡の手引きをやったりはしますけれども，いったん抱えてしまった鉱夫は絶対に離さない，囲い込もうとするわけですよね。そこで友子というのは鉱夫の自由な移動を保障する。そこで親方層，飯場頭層と一般鉱夫層の利害の対立があったのではないか。

武　田　いや，同一だと言っているのではなくて，見かけ上まったく異なると判断される組織が同一人物に動かされているときに，その組織のどっちが動いていると見るのかということが問題だと言っているのです。

残された研究課題 ── 採鉱技術と採鉱夫の熟練，飯場組織と友子の関係etc.

村　串　私は『資本論』研究者であったので，労働の指揮，それから炭鉱では繰り込みとか，あと労働現場の張りつけですよね。これがどうなっているかというのは大問題なんだけれども，実際に研究し終わってみると，大問題がすっかり抜けている。今の議論でもまったくそうなんですけれども。

個々の論文で少しずつ書いているんですが，総括的にそれをやっていない。だから，もうだいぶ忘れちゃったのですが，基本的には雇用関係に類するものは飯場制度かなと思っていて，指揮系統は資本から飯場に来て，それで炭鉱だと小頭がいて，つまり飯場が上にいて，指揮系統，ラインがそうなる。

金属鉱山の場合は基本的な研究課題がすっぽり抜けていて，資料がないこともあったかもしれないけれども，経営分析をすればそんなのは出てくるわけで，経営集団のラインと並行していっている，１本ではないと私はいつも言っているんです。資本のラインの管理，監督と，それから飯場頭

が資本の命令を受けて，下の配置する場所を決めたり，そういうラインがありますよね。そのときに細かく具体的に，例えば足尾，別子ならこうだったと，実証が全然抜けてしまったんですね。このライン，指揮系統がね。

そして，どこまで独自性をもっていて，例えば賃金の計算はこっちのラインでやっているわけですが，例えば切り羽の配置なんかは具体的にどうなっているのか。実に多様ではっきり出てこないにしても，どこかをモデルにしてしっかり押さえておけばよかったなと思ったんだけれども，全然やっていないんです。非常に抽象的に一般的にしかやっていないので。

市　原　その二つのラインがあるというのは炭鉱でもおそらく一緒で，炭鉱の納屋制度と北海道の飯場制度ですか，その時代はやはりそうですよね。

私が今いちばん関心をもっていて，よくわからないというか，知りたいのは，会社側のラインの係員ですね。この人たちがどういう人だったのか。それから，大学なんかを出て入ってきたエンジニアはかなり上のほうにいくので，実際の坑道をどうやって掘るかとか，そういうところは現場で技術を身につけた人たちがかなりいたと思うんですよね。

村　串　そうですよね。大学出だけではやっていけないので，つまり職員に現場の人をピックアップしていくわけですね。ヨーロッパだと，すぐゼム（やつらthem）としてあつかわれてしまうのだけど，日本の場合はわりあいルーズで，労働者でこっち側にいった連中に対して，そんなに敵対的な関係にならない。いろいろ付け届けの問題があったりなんかして起きてはいるけれども，両方，インテリと熟練鉱夫をピックアップして共同でというか。

市　原　技術とか熟練を論じる場合には，上のほうに学卒のエンジニアがいて，現場の係員とか，実際に現場でいろいろな坑道を掘ったり，機械を入れて現場に定着させる技術を担っている現場経験をかなりもった係員，そして飯場頭と友子の親分，この世界全体を描かないと，何かわからないような気がする。

萩　原　僕の調査経験だと，職制では労務管理は半分しかできないですね。最末端のforemanとか監督者といわれている人たちが労務管理をやるわけですが，どうしても職場の作業組織のリーダーに任せざるを得ないところがあるんですよ。また，それをうまく使うわけですよ。そうしないと管理そのものができない……。

例えば，町工場などを見ていると，勤務時間の始まりと終わり，昼休み，納期，それから賃金，日給月給なのか請負給でやるのか，そういうのは決まっているけれども，自分の機械は絶対に他人に使わせない。納期が決まっているから，どのように仕事をやるかというと，定時までに全部やってしまうとなると一生懸命やるし，体の調子が悪かったら，ゆっくり残業してやるということになる。工場長の命令なんか誰も聞いていませんね。社長も工員にまかせっきりですよ。

武　田　道具ではないから，機械は経営のものですよね。

萩　原　そうです。

武　田　そうすると，その人の技能はポータブルではないんですね。

萩　原　いや，ポータブルだけど。というか，ほかの企業で使える技能かどうかですよね。

武　田　はい。

萩　原　もちろん使えますよ。

武　田　機械だとしてもですか。

萩　原　機械というのは，こういう意味です。熟練工というのは，自分が使っている機械を他人にいじられるのがいやなのです。だから，病気で休んでいて，ほかの労働者がウッカリ他人の機械を使ったら，すごいトラブルになってしまう。おれの機械を勝手に使いやがったといって。

村　串　機械って，くせがついちゃうからね。

萩　原　うん。だから，使わせない。労働者というのは，特に熟練工になると自立してしまっていてオートノミーが非常に高いから，むしろそれに任せて，全体としてうまく管理するということにならざるを得ないで

す。

村　串　　でも鉱山は，やはり地下労働であるということで，非常にわかりにくい部分がある。資料があまり残っていない。だけれども，反省すれば，先ほど言ったように私は『資本論』ふうにいうと，いちばん大事な労働過程と生産過程の研究を落としてしまった。

萩　原　　マルクス主義者は，まず生産過程から研究しなければいけない，と昔よくいってましたよね。

村　串　　労働過程とか生産過程とか言っていながら，実はそこのところがわかりにくいこともあって，粘り強くそこのところを押さえなかったというのが最大の欠陥だと。最近，言われてみると，どうもそうだと思って。

武　田　　いや，欠陥というより，我々に与えられた課題ということになると思います。

村　串　　それでもやれば，かなりできたのではないかと今は思うんだけれども，どうも問題関心がよそに拡散してしまった。それから，トータルにやらなければいけないという課題が，歴史のほうに流れていってしまった。

萩　原　　でも，もし村串さんの本で，熟練の性格分析をきちんとしてあって，それから近代的な機械堀りに転換したときに，労働力の養成機能とか福利厚生とかがどのように変化していったのかということを，生産過程と技術の変化まで全部やってしまっていたとしたら，残った人たちはもうやることがないじゃない。ジ・エンドじゃない。これで終わりじゃない。土井さんはいらなくなっちゃうんだよ。（笑）

村　串　　特に私は前から言っているんだけれども，市原さんが友子研究をしなくなっちゃったじゃないの。　そうでもないの？

市　原　　いや，しなくなりましたね。

村　串　　でしょう。それがすごく残念なんだ。私の研究で友子研究の必要が終わったわけではないのに，なぜやらないのかなと，ものすごく不

満を感じている。だから，まだ若いんだし，たまたまかどうかわからないけれども，土井君が出てきたので，ぜひそこらへんを，技術や熟練や生産過程をやってほしい。

ただ，私は『資本論』から出ているから，わりかしオーソドックスに攻めようという面があるんだけれども，土井君はそこにやや心配のところがあって，労働市場にふわっといってしまうというところが。

土　井　いや，生産過程もやりたいんですけれども，これは資料がやはり少ない。特に明治時代の。

村　串　ぜひ熟練論と生産過程論と，それから労働の指揮のところは言われるとおりなので，労働組織の研究をやっていただきたい。要するに，飯場制度と友子の関係だって，そんなにはっきりしていませんよね。全然はっきりしていないんだよ。

武　田　山によってだいぶ様子が違いますし。

土　井　足尾銅山なんていうのは，飯場頭がいつまで請負主体としてあったかというのすら確認がとれないというか，文字資料としては出てこないんですよ。何年まで請負をやっていたか，わからないということになっちゃうんです。

萩　原　別の産業だけれども，鉄鋼業の研究をした本はいっぱいある。戦後鉄鋼労連という産業別の組合ができた。鉄鋼労連は調査が充実していて，加盟組合の全部を網羅する調査を良くやっているんです。例えば新日鐵の製鉄所は八つも九つもあるわけ。ところが労務管理は製鉄所ごとにバラバラでしてね。

日本橋の本社が全製鉄所を画一的に管理しているかというと，例えば仕事のローテーションの仕方は製鉄所によってやり方が本当にもうバラバラ……。各製鉄所にはそれぞれの歴史があるでしょう。この高炉はいつできたとか，いつ改修されたとか，それによってヒストリーがみんな違っている。だから鉱山なんかも大変だと思いますよ。（笑）

村　串　今の話で例えば別子と足尾とでは採鉱方法も友子組織もずい

ぶん違う。二つの暴動のときに飯場制度の動きも違う。特に別子なんかは飯場頭がかなり自立性をもっていて，それを抑えるために暴動が起こったといわれているわけです。そのことも，今までの研究だと，飯場頭が不正をやったり，だからそこのところばかり関心がいっちゃうんですね，私もそうだけれども。

そうではなくて，労働の指揮系統とか雇用関係からもう一度見直さなければいけないという気が，今日の議論のなかで感じますね。

市　原　研究するのはすごく難しいですけれどもね。

村　串　資料がないんだよ。

土　井　たしか別子の暴動は，階段堀りへの移行と時期が同じなんですよね。

村　串　明治40年。

土　井　やはりそれ以前は，別子というのは面白くて，飯場頭への作業請負というのがすごく大ざっぱなんです。団体に，ここを任せると任せて，それである一定期間，半月ぐらいかな，それで現場員がやってきて，何立方メートル掘っているか。別子の場合は，底が全部鉱脈で非常に鉱床が大きくて，そこをどれだけ掘ったかを実測して，それで請負賃を決めるんですよね。だから，こんな大ざっぱなやり方はたぶん別子でないとやれなかったのではないか。

そういうおおらかな請負形態が，やはり階段堀りに代わってから変わったんだろうと思うんですけれども，いかがですか。

武　田　それは階段堀りではなくて，団体請負制の賃金決定の仕組みの変更と言うべきだと思います。坑内の組織が，採鉱の計画が組織化されるという意味での階段堀りではないと思います。別子はトンネルを掘るよ

うに鉱石を掘ることができる鉱塊鉱床ですから，はしから鉱床を掘っていけば，ほぼ均一な鉱石が採れるので，ある意味では大ざっぱなというか，素朴なことでできた。けれども，それでは相当に不正が発生するので，経営側が直接管理しはじめたと通説では言われているんだと思います。

村串説の面白いところは，そのときに友子と飯場と，そしてその外側にさらに組合という装置を置いて，この三つがその後どういうふうに綾をなして変わっていって，どのように組み合わせ直されるのか。それを経営側がどう見ているか，労働側がどう見ているか。そこの昭和にかけての動きはすごく面白いと思います。

ただ，その話をするためには，最初の組合のないころの経営と友子との関係がどうなっていたかがもうちょっとわかると，あとからポッと組合が入ってきたことの意味もわかりやすい。やや唐突に組合がでてくるので「えっ」という感じになるのです。

友子と労働組合

萩　原　それはアメリカの例で言うと，テイラーがforeman（職長）によるショップコントロールを提唱し始めたときに，金属機械工業にはクラフトユニオンがいっぱいありましたから，ユニオンともろにぶつかっちゃった。科学的管理法に関する論争を，ワシントンの連邦議会で延々とやっているのですよ。科学的管理法の妥当性をめぐって，労使双方の代表を呼んで，膨大な公聴会記録が残っている。すごい記録です。会社側の指揮命令系統とクラフトユニオンの自治組織とが真っ向から衝突してしまったのですから。

市　原　組合のことで言いますと，炭鉱ですと，筑豊でも日本鉱夫組合とかありますよね。あれは結構あの後の時期まで残るんですけれども，あれはほとんど会社のなかというか，炭鉱のなかに入れないんですね。ほとんど首を切られた鉱夫たちが組合を守っているという状況なんですね。

北海道なんかである程度炭鉱のなかに入っていけたのは，友子がかなり

影響しているんだろうと思います。あの本のなかに書かれている全国坑夫組合がどういう実態だったのかというのは，かなりあやしい組合ではないかという思いはあるんですけれども，坂口義治なんかが組合を組織していったときには，友子の親分たちのところに話をつけに行って，それである程度獲得している。

ただ，その分だけ，会社側からの攻撃も激しくて，あまり長くはもたないですね。

武　田　あやしい組合って，どういうものですか？

市　原　全国坑夫組合というのは，結局友子の関係者が東大出ですかね。知識人の人に，友子というのがあるから，これを組合にしたらいいという話をして，それでつくられた組合なんですね。それが実態として果たして労働組合としてちゃんと活動していたのかどうか。

武　田　組合員は友子の構成員ですか，それとも，失業している友子の構成員？

市　原　いや，おそらく友子の構成員じゃないですかね。そのあたりはよくわからないですけれども。

村　串　それは友子ですよ。そのケースは，足尾と夕張，それからあと常磐だと千代田炭鉱と，あと神岡。神岡は全国坑夫組合か友愛会かわからないのですが，その三つに関して言えば，みんな友子なんですよ。

友子を会員にして，あるいは友子組織が新友子と称して，労働組合を名乗るわけです。

萩　原　しかし組織が存続したのはせいぜい１年程度でしょう。

村　串　１年ちょっと，２年はもたない。そこが最大の弱点なんですけれども。だから，そういうのを明治30年代からやっていれば，クラフトユニオン的にかなりやれたのではないかと思うのです。やはり金属鉱山には友子が多かったから，友子の労働組合化はもっとできたのではないかなと。炭鉱についていえば，金属鉱山ほど熟練鉱夫の結集力はないから，いかなかったんだけれども。

武　田　友子の構成員が組合員だというときには，友子単位で組合のメンバーになるという意味ですか。

村　串　いや，もっと単純なのは，千代田炭鉱というのは，友子メンバーが目覚めて，全国坑夫組合とコンタクトをとって，炭鉱にある友子を労働組合にしちゃおうと。そして，おれたちは「新友子」という労働組合だと名乗ってしまうんですよ。しかし，それは友子からの逸脱だというので，旧友子が反対して分裂しちゃうんです。

武　田　だとすれば，それは労働組合ですよ。

村　串　ええ。それで，おれたちは労働組合だとやるんですよ。ただ，友子の伝統はそのまま引き継いでやろうと。

市　原　伝統は引き継ぐし，友子の構成員が組合に入って，友子の結びつきが組合の基礎になることはなるんですけれども，友子が組織として労働組合に変わったという事例はないですよね。

村　串　それは違う。

市　原　それだとわからないですけれども。

村　串　友子が労働組合に，私は成長転化したというケースとして論じているんですけれども。

市　原　それは資料がないのでわからないのですが，要するにあれは友子のなかの一部の人たちが，おれたちが組合をつくったと言っているのかなと。

村　串　そういうケースもあります。

市　原　だから，組織として，ある一団の友子が労働組合にそのまま組織替えしたというのではないと思いました。

村　串　だから，集団入党ではないけれども，友子の連中が友子の組織を労働組合だと称したことは，その千代田ははっきりしている。ただ，夕張なんかの場合は，友子の連中を中心に，もう一度労働組合を中心につくるというケースですね。先ほどのとはまったく違いますよ。友子の集団が，おれたちは労働組合だ，この友子は労働組合だと言ったケースと，友

子の連中を中心に労働組合を組織したケースとがある。

ただ，全国坑夫組合の方針も，友子の連中を労働組合に組織しようという呼びかけと同時に，友子を労働組合に改編しようとする二面性をもっていた。

武　田　丸ごと移行する？

村　串　移行と，そういう方針が二重にあったのです。私の深読みですかね。

市　原　いえ，全国坑夫組合をつくった知識人と，そこに失業した友子の鉱夫がやってきて，友子を利用できるよという話をして，そういう方針が出たんですよね。それはただ単に，そこのレベルで友子を組合にしようと言っているだけですから，実際の友子がそういう方針で動いたわけではない。

村　串　もちろんね。ただ，友子のリーダーたちは，その方針に乗るわけで，これはインテリがそのように誘導していった側面と，やはり友子のリーダーは明治30年代からそうですが，友子はこんなのでいいのかなと思っている人たちがいるわけで，特に労働組合がこっちにできる，おれたちもああいうふうになりたいよと，そういう自然成長的な意識というのは結構あったのではないかという気がします。

だから，あの神岡のケースがそうですよ。労働組合がこっちにできますよね。そうすると，じゃあ，おれたちも労働組合を名乗ろうではないかというのがあったので，そこのところは友子集団の労働組合化ではないか。

萩　原　ある程度そこら辺がわかってくるといいのですが。イギリスの機械工組合の場合に，最初はユニオンじゃないんだよな。機械工組合と訳しているけれども，societyですよね，協会とでも訳せるのでしょうか。それが後にユニオンに名前を変えてしまうんだけれども，ユニオンにしようというときに，組合のなかで一種の論争が当然あって，要するに自立した自主的な職業団体なのか，それとも企業とやりとりする交渉団体に移っていくのかどうか，そういうところが問題だったわけです。

だから，団体交渉にいくか，それとも組合が職人の賃金を一方的に決めてしまって，これを破って働く人がいたら，チームスターみたいに排除してしまうというようなやり方でいくのか。もしユニオンとなってくると，クラフトユニオンではやっていけないんですよ。もうちょっと他の労働者との連帯という意味で，ほかの職種も入れないとだめだ。同じ機械工場で働いているんだったら，仕上げ工はどうする，フライス盤工はどうする，メッキ工はどうする，みんな一緒に入れてしまえ，メタルの組合だとなってしまうのです。

そうすると，企業別，工場別の支部ができて，そして産業別組合にだんだんなっていってしまう。

武　田　先ほどの話がまだ腑に落ちていないんですけれども，村串さんの議論の仕方は，例えば友子という集団をとらえるときに，基本的には機能，ファンクションでとらえようとしている。こういう機能をもっているから，こういう集団でこういう性格をもつものを友子とすると言っているわけです。いちばん重要なところでは。

ところが，先ほどの友子か組合かという話は，ひどく系譜論的で，その組織がどういう機能を果たすようになっていたかという議論を飛ばしている感じがします。友子という集団を母体にしようが，あるいはそこにいた人たちが「やろう」と言おうが，それが組合と宣言して，本当に組合の機能をしているのなら，どういう系譜であろうと組合なのではないでしょうか。

萩　原　そこはどうですか。先ほどの僕の質問と同じなんだけれども，ユニオンになると，企業との関係をどうするかというので，friendly societyというのはいわば仲良しクラブですからね。たまたま企業で同じ職種で働いているやつのなかに仲良しクラブができていく。

村　串　だから，そのイギリスのブラザーリングがまったくそうで，ブラザーリングと言っていたものがスコットランドとノースイングランドにあるわけです，societyが。それが全国的にならないんですけれども，地

域的にスコットランドならスコットランドで統合してユニオンと言い出すんですよ。

それで友子の場合はどうだったのかと考えるのですが，友子が組織を統合しようとしたケースは二つあった。ひとつは，明治30年に北海道の各地の炭鉱の友子の親分衆が集まって同盟を組織しようとした。もうひとつは，友子そのものが企業内連合みたいなものを組織した。友子同盟というのは，小さい組織の友子ではなくて，友子が集まって同盟と言い始めた。

だから，そういう動きというのは北海道であるんですけれども，そのときはある種の自己主張，あるいは「労働条件を守ろう」みたいな，労働組合の課題みたいなものがチョロチョロ出ている。それはどうもキリスト教の影響があって，労働組合の影響がそこにあらわれたと見るんです。つまり，イギリスだって，そんなものですよね。誰かが……。

萩　原　だけど，今の武田さんの質問のポイントは，賃金をどう決めていたかなんだよ，請負単価を。

村　串　だから，全国坑夫組合についていえば，そういう要求が出てきます。賃金の改善みたいなものが出てくる。ただ，友子は一般的に，綱領も何もないわけですから，友子規約というのが明治30年ぐらいから出てきますが，そこには労働条件の改善とか賃金要求は一切ないんですよ。いわば，規約の第１章に，友子の利害を守ろうと。

それは非常に抽象的で，労働条件とか賃金を高めようとかというううたい文句というのは，友子の規約では私の記憶でいえば全然ない。だから，それはクラフトユニオンではない。

萩　原　ただ，都市には職人の賃金について，一種の相場があるよね。世間的に成り立っている相場，みんなが納得している相場。大工は１日何銭とか。たぶんそれはあったと思うんだよ。金堀大工の場合は，請負単価の相場が。

村　串　だから，友子は友子としてそういう要求はしないけれども，例えば賃下げとかがあれば，連中は結束して労働争議をやる。そのときに，

どうも見ている限りでいえば，例外は明治40年ですよ。あの暴動の前後についていえば，生野でもそうですけれども，友子が集まって，友子が賃上げ要求をやっちゃうんですよね。

ところが，そうすれば友子は労働組合だと弾圧されてしまいますよね。だからその後の，あるいはそれ以前の労使紛争というのは，友子を全面に出さない。事実上，友子のリーダーが先頭を切ってやる。これは永岡鶴蔵なんかもそれをやっているわけですけれども。

市　原　組合を組織するとか，運動をするときに，友子の親分衆の力を利用するというと方法だけど，生かしていくというイメージなんですよね。組合を組織するときに，飯場に行って，そこにいる友子の親分たちに話をして，そして理解をしてもらって組合に入ってもらう。だから，そのときに，では友子が組織として組合を支持するとか，組織として入るというのでもない。

村　串　ただ，その例外が暴動のときには……。

市　原　そうですね。いくつかの例外がある。

村　串　連合して，全山なんとかといって，友子の代表を集めて，友子として要求する。それから，神岡の場合はそういう労働組合が出てきたので，友子として何かやらないと具合が悪いので，アリバイ作り的に要求する。そういう友子もある。いろいろなのがあるんですけれども，イギリスなんかを見ていると，社会的にそういう組織が生れやすい。

たとえば共済組合のfriendly societyの組織率が，18世紀から19世紀はものすごく高いんですよ。friendly societyは何をやっているかというと，共済だったり，例えばfuneral clubとかbox clubとか，それも都市にある雑業ですね。何でも入れてしまう。

それから職業別の共済もあるんですよ。そのなかにブラザーリングという共済組合ではない，そんなものがある。そういうことに対する社会的な雰囲気というのがあります。そしてクリスチャンがレフト系の労働者の組織化を煽るというのがありますよね。

日本には，どうもそういう風土が少ない，ないんだよね。

萩　原　いや，そんなことはない。ヨーロッパにおいてはクラフトユニオンの抵抗があってほとんどテイラーリズムは普及しないんですよ。日本でも似たような状況があるのです。

村　串　いや，それは明治以前の話だよ。

萩　原　いや，そうですけれども。日本の場合は，戦前まで基本的に請負給ですよ，工場はね。戦争中に日給月給制でホワイトカラーの賃金支払い方法にだんだん近づいていったんだけれども，請負給が徐々になくなっていくのは1940年代以降ですね。それまで基本的に戦前は請負給だから。

請負給が安定しているのは，現場が納得できる世間的な常識に沿って単価が決まっている場合です。あとは労働者が自分で判断して，子どもが生まれたから少したくさん稼がなければならないという人は，うんと仕事のある工場へ移ります。

先ほどの渡りのところでちょっと言いたかったんだけれども，渡りは仕事を覚えたいとか，それからこの会社は気に食わないから移るとか，移動の理由はいろいろですよね。そのなかに，子どもの数が増えたから，少し稼ぎを多くしなければいけないからというので，たくさん請負給が取れる会社を探して，そこに移る。

これは大田区の機械工の場合はごく普通で，もし単価の決定でこじれたときには，もうこれは組合があろうとなかろうと，必ず紛争になる。もめる。大もめにもめてしまうんですよ。

土　井　明治40年の足尾暴動のときも，やはり現場員の査定が争点になっています。現場員の労働条件の査定，賃金査定，そこに不正があったり，賄賂をとったり，実際そういうこともやるんですけれども，やはり出来高賃金の問題でこじれて，それが一気に現場員をやっつけろというかたちで噴出する。

市　原　現場の係員が労働者から賄賂を取るとかというのは，どこで

もあるんですよね。それは明治期からずっと言われていることで，袖の下で昇進するとか給料が上がるとか。

萩　原　労働者は金をちょろまかすというか，営業マンが集金で顧客から裏金を取ったり，会社に内緒でコミッションを取るといったことをやる。だけど，そういう裏金を取ったりするやつのほうが，小池和男さんは自分の実家が中小企業をやっていたからとよく知っているんだけれども，そういう使用人のほうがかえって能力があるんだよって。(笑)それをうるさく言うと，仕事の方もだめになってしまうとも言ってましたね。

市　原　おそらくそういう係員というのは，現場上がりだったりして，二村先生もおっしゃっていますが，あまり給料は高くないですね。

萩　原　コツを知っているんだね。人の才覚を見極めるコツを……(笑)。

最後に，二村さんが体の調子が悪くてこの議論に参加できなかったわけですが，僕がこの際ぜひ聞いておきたかったのは，足尾暴動のことです。ぼくはアメリカ労働史をやっているのでとくに興味があるのです。アメリカでは，1920年代に大企業で従業員代表制とか，企業年金などの福利厚生とか，welfare capitalismと言っていますけれども，それがほとんどの大企業で一斉に普及していく。その過程で労働組合はだんだん排除されていってしまう。

福祉資本主義への転換のきっかけになったのは，ロックフェラー系の企業が経営していたコロラドの鉱山で起こった大労働争議なんですよ。コロラドで起きたラドローの大虐殺というんだけれども，鉱夫たちはダイナマイトを使うから，ダイナマイトを持ち出してボンボン会社の管理職の家に発破をかけたりした。州兵が出た大変な争議でした。研究書もいっぱい出ています。

東大に来ていたハーバード大のゴードンさんは，二村さんが足尾暴動をやっているというので二村さんと仲がいいでしょう。僕が知っている限りで言うと，足尾暴動はその後の大企業の労務管理のあり方にすごく影響し

たのではないかと思うんですけれども，どうでしょうか。

武　田　そうだと思います。

村　串　そのとおり。あなたが喜ぶかもしれないけれども，要するにうまく友子を取り込んで労使関係を安定させていくというのが基本的な流れね。それは，友子のいないところの民間のほかの産業にもすごく刺激を与えた。

別子の友子のところで書いているんだけど，やはり別子の経営者が足尾見学するんだよね。足尾に行って，足尾の友子の編成替えをみてくる。おお，すごいなと帰ってくる。だから，別子の友子の編成替えというのは遅いの。大正13年ぐらいから始まるんだよ。足尾はもう暴動のあと，すぐ友子の再編に努力するじゃない。別子はそれを見ていて，うちも暴動が起こったのに，友子はそのままにしておいていいのかと，大正13年から鷲尾勧解治が友子の改編をやる。

武　田　鷲尾ですね…。

市　原　記憶が定かではないんですけれども，足尾に三井か何かも視察に行っていますよね。大正期に従業員団体をつくるときに足尾を視察に行って，あそこの鉱夫飯場組合が今度は鉱職夫組合になるんでしたか。鉱夫飯場組合が，飯場制度が廃止されて従業員団体に変わりますでしょう。あのあたりで視察に行って，自分のところに生かしている。

土　井　足尾は暴動のあとに友子の企業内化というのを実際にやっていくんですけれども，同時に飯場制度も改革をしていくんですよね。だから，旧来の労務管理のあり方自体を根本的に見直して，つくり直していく。その飯場制度改革と同時並行的に福利厚生とか，そういったものも足尾では1910年代にもうすでに出てくる。

だから，そのくらい暴動というのはインパクトがあったんだろうと思うんですよ。

村　串　先ほどの議論でいって，飯場制度の改革は労働指揮系統にどのようにかかわったのかということと，労働過程そのものがどう編成替え

されたか。土井君の論文を読んでいると，そこのところは比較的よく分析していると思うが……。

萩　原　僕の大ざっぱな図式なのだけれども，足尾暴動がきっかけになって，日本の経済界は協調会をつくるわけですよ。協調会がいちばん参考にしたのはアメリカなんですね。アメリカの大企業は組合を排除して，従業員とどうやって関係をとりもつのか。三井と三菱と住友と古河の4大財閥がですよ。それで，その実践モデルをつくったのは，どうも足尾鉱山だったのではないか。それを三井もモデルにして……。

市　原　共愛会ですね。

萩　原　一種の労使協調の企業内のいろいろな政策をどうやっていくかというので，そういう意味で金属鉱山の影響は非常に大きかったのではないでしょうか。

村　串　そうですね。私は社会主義運動がだめになっていくことばかり見ていたから，あまり全体としての労使関係に興味がなかったので，トータルな鉱山の労使関係，今のような問題をぜひ研究してほしいな。まだ市原さんも……。

市　原　なぜ私が友子をやらなかったのかという話ですね。炭鉱だというのが大きいんですよね。炭鉱では，友子が労使関係に与えた影響が限られていますから，私の研究の中で中心にならなかったのです。

萩　原　財閥本社がアメリカの調査をずいぶんやっています。法政大学にはたまたま協調会の文庫が全部残っていますが，かなりの量ですよ。それでロックフェラーの何とか鉱山ではどんな労務管理をやっているかとか，そのような資料がたくさんある。

武　田　三菱がたぶんいちばん組織的にやっていて，合資会社のなかに労務審議会というのをつくって，ものすごく膨大な記録を残していますけれども，それは面白いです。

萩　原　そうですね。三菱ですね。

萩　原　最後はかなり散漫になりましたけれども，こんなところで座

談会を閉めたいと思います。

武　田　村串さんの研究がいかにすごいかという話を十分にしないまま，終会になっちゃって，ちょっと申し訳なかったです。

村　串　しかし，わかりました，じゃあ，あと5年待ってください，今日出された問題点をつめていきますから，というわけにはいかないのでね（笑）。若い土井君の仕事に期待しますよ。

萩　原　僕はこれまでまったく勉強してこなくて，最近ようやく本気で村串さんの本を読み出して，本当にショックを受けました。金属鉱山にこういう労働の歴史があったというのを知って。これでますます歴史の見直し修正をやらなければいけないな，リビジョニストは頑張らないといけないなと思いました。

今日はどうもありがとうございました。